

別注品、別製品を通してみる 東京圏注染の技と意匠の系譜

— 「特別展 東京本染注染の手ぬぐい・ゆかた」 出展資料の検討

大久保 尚 子

キーワード

東京本染、注染、手拭い、ゆかた、伝統的工芸品

はじめに

「注染」とは手拭いや浴衣を染める手仕事の型染め技法である。東京周辺は今日に続く主要産地のひとつであり、東京と近県の注染業団体である関東注染工業協同組合の注染技法によるもの作りは、「東京本染注染」の名称で2023年10月、経済産業大臣指定伝統的工芸品指定を受けた。これを記念し、2025年5月1日から5月11日まで江東区深川江戸資料館にて「特別展 東京本染注染の手ぬぐい・ゆかた」（以下、本展とする）が開催された。筆者は本展監修者として展示計画、出展資料選定、展示解説執筆等に携わった。本展では東京圏の注染の歴史、技と意匠の特性を広く紹介することを目指し、東京で製作された明治期以降の手拭い、浴衣地、これらに付随する掛け紙を中心に、併せて製作関係資料（別注製作記録、手拭い雛形、肉筆浴衣図案、注染型紙等）を展示した。展示資料は、浴衣地の一部を三勝株式会社¹および有限会社丸久商店²から借用した他は、手拭い、浴衣地制作に長年にわたり携わってきた豊田満夫氏のコレクション（豊田コレクション）によった。

豊田コレクションは、日本橋堀留にある明治5年（1872）創業の手拭い浴衣地製造加工卸問屋、戸田屋商店に昭和27年（1952）から50年間勤務した豊田満夫氏が、意匠参考として蒐集した手拭い、浴衣、風呂敷、木版美術のコレクションである。約10000点に及ぶ手拭いはコレクションの核であるが「東京製」に的を絞った展示は今回が初めてであった。

本展の展示構成は以下の通りである。なお出展資料目録を【表1】に示した。以下、本稿で出展資料を取り上げる際には【表1】の資料番号を付して示す。

I 東京本染注染の歴史 明治大正期、東京の注染手拭い製作 / 手拭いにみる昭和初期注染全盛期から戦時体制、戦後復興まで / 注染浴衣地の成熟から戦時体制へ

II 昭和初期の「趣味の手拭い」 趣味手拭いの会「美蘇芽会」 / 松屋製趣味の手拭い / 松田青風筆「十二月劇画手拭」

Ⅲ 企業、商店の手拭い 企業の配り物－個性とブランド / 商店の手拭い－町のなりわい / 年始の挨拶－干支手拭い

Ⅳ 芸能と手拭い 歌舞伎 / 日本舞踊、邦楽など / 落語、寄席芸 / 演劇、映画 / 歌舞伎趣味の手拭い

Ⅴ 記念や遊びのあつらえ手拭い

Ⅵ 暮らしの中の浴衣 企業の配り物 / 芸能、相撲界の配り物 / 女、男、子どもの浴衣

Ⅶ 豊田満夫氏の仕事 豊田氏の扱った別注手拭い及び関係資料

Ⅷ 手拭いにみる東京 「帝都十景」手拭いより / 手拭いでたどる東京

手拭いや浴衣地は一般販売用に作られる「仕入れ」ものと並び、個人、店、企業、団体などの注文で意匠を調整し作られる「誂え」もの即ち別注品がある。また販売、頒布用だが意匠の創作性や染め技巧を追求し手を掛けて制作される鑑賞主体の手拭いや、特別企画の浴衣地などは別製品と位置付けられよう。江戸東京では少なくとも 18 世紀後期以来、別注手拭いの配り物や創意を凝らした手拭い合わせなど、意匠の工夫と楽しみを伴う手拭いの文化が育まれ、近代以降も受け継がれてきた。浴衣地にも別注品を配り物とする文化があり、古典芸能の会や祭礼、私的な遊びでのお揃いの誂えは今も続いている。

別注品、別製品は、誂え主や企画者が把握できる場合も多く、製作背景や製作時期を辿りやすい。本展では、「東京製」と考えられる作例として、東京周辺における別注品と、東京の専門業者、百貨店の企画、あるいは東京の画家、職人が関与した創作企画などの別製品、および別注品製作関係資料を選んで展示した。別注品、別製品では注文者、企画者の意向を直接反映した意匠が実現されてきた。これと連動して東京周辺地域における技の特質も形作られてきたのではないかと。

本稿は「特別展 東京本染注染の手ぬぐい・浴衣」の展示内容に基づき、近代以降の東京圏注染の歴史展開を再検証し、特に別注品、別製品の意匠追求の様相を、技の特質に照らし具体的に示すことを目的とする。第一章では伝統的工芸品指定申出に際し示した東京本染注染の技法特性、および技法と産地形成の歴史の概要を述べる。この内容はこれまで示してきた筆者の研究成果に沿ったものだが、産地形成に関し未発表の内容を含む。第二章では近代東京圏における注染の歴史展開を、製作資料、別注および別製の手拭い、浴衣地の優品に焦点を当て具体的に跡付ける。第三章では昭和期以降について、別注製作の状況を把握した上で、企業や一般商工業者の配り物を中心に別注手拭いの諸相を捉え、誂え主たちの配り手拭い意匠に対する姿勢を浮かび上がらせたい。

1. 伝統的工芸品「東京本染注染」の技法の特性と歴史展開

経済産業省が管轄する伝統的工芸品指定とは、「伝統的工芸品産業の振興に関する法律（伝産法）」³に基づき、一定条件を満たす伝統的工芸品を産地組合の申し出により指定するもので、伝統的工芸品の文化を保護するだけでなく、産業活動として維持・発展することに主眼を置いて補助事業が行われている⁴。指定要件は「1 主として日常生活の用に供されるものであること。」「2 その製造過程の主要部分が手工業的であること。」「3 伝統的な技術又は技法により製造されるものであること。」「4 伝統的に使用されてきた原材料が主たる原材料として用いられ、製造されるものであ

ること。」「5一定の地域において少なくない数の者がその製造を行い、又はその製造に従事しているものであること。」を満たすことであり、3、4にある「伝統的」とは「具体的には、100年以上の歴史を有していること。」と注記されている⁵。筆者は「東京本染注染」の伝統的工芸品指定申出資料作成等を支援した。注染技法自体は全国の複数産地で継承されており、中でも大阪では東京に先立ち「浪華本染め」として2019年に伝統的工芸品指定を受けている。このため東京本染注染の指定申出には当産地の注染技法の特性、産地独自の歴史と職人の系譜を明示することが求められた。

二章以下の検討の前提として、以下に東京本染注染の伝統的工芸品指定申出資料の内容に則し、技術技法の特性、注染業と技法の歴史展開を確認する。

(1) 東京本染注染の技術技法とその特性

「注染」は手拭いを染めることから始まった手仕事による両面染めの型染め技法である。手拭い一本相当の長さの型紙を使い、生地を折り返しながら防染糊を型付した後、折り重なった生地の上から染料を注ぐので、両面が等しく染まる。主要工程に【型付】と【注染】がある。その概要と、東京圏で継承されてきた注染技術の特性について以下に述べるのと併せ、「東京本染注染の主要工程」「注染技法の種類」（後掲）を図示した。

【型付】は図案を彫った型紙とへらを使い、生地に防染糊を付けていく工程である。この工程に先立ち生地の準備（練地、練地後の生地の乾燥、地巻）と防染糊の調合を行っておく。

①木枠に固定した型紙を生地に下ろし、へらで防染糊をこすりつける。②型紙を上げ、正確に生地を折り返す。これを繰り返していく。

東京本染注染では続けて型付する量は、浴衣地では二反、手拭いでは概ね四反分までを基本とする。この反数は相対的に少ない。東京では伝統的に細部にこだわりのある意匠が好まれ、特に浴衣地においては、江戸時代から継承されてきた長板中形技法の微細な意匠を精緻に型付する長板中形技法の手仕事を理想とする価値観が共有され、緻密な染め上がりが求められてきたことによると考えられる。

型付工程では、生地の折り返しの正確さ、糊置き均一さが求められ、柄により糊の厚さを加減する。わずかなずれやシワが、重ねた生地全体に影響してしまう。一反続けて使う浴衣地では折り返し部分の柄のつながり、均質な型付が特に大切であり特段に熟練を要する。型付の難度は柄の細かさ、折り返し部の構図により異なる。

【注染】は型付後の生地を注染台に置き、「ヤカン」と呼ばれる道具を使い、染料液を上から注ぎ浸透させる工程である。この工程に先立ち必要な染料液を準備しておく。染めた後は、生地を水洗して糊などを落とし、天日乾燥後、仕上げ加工を行う。

①重ねた生地を染台に置き、上から染料液を注ぐ。②重ねた生地全体を裏返し、裏からも染める。染台の下に減圧吸引装置があり、ペダルを踏み染料を吸引しながら染めていく。吸引装置導入以前は染台の上から「フイゴ」や「ラッパ」で空気を送り染料の浸透を助けていた。

適切な注ぎ方（方法、量）、吸引するタイミングなどは、染料、柄の性格により異なる。いずれかを誤ると染めムラなど不良品の原因となる。

東京本染注染で使うヤカン（染料を注ぐ道具）は他産地の道具に較べ注ぎ先が非常に細長い。染料のキレがよいので、繊細な作業に適すると考えられる。このような形状のヤカンは100年以上前から使用されてきたことが確認できる⁶。

染め方に次の四種がありそれぞれに技術力を要する。

・一色染 一色の染料のみで染める技法。白く染め残す部分が多い「白地一色」（例4-2《6代目尾上菊五郎（キクゴロ格子）》【図1】）、染める部分が多い「地染一色」に大別される。染料液を注ぐ量、速度を誤ると染めむらなどができやすい。江戸後期以来、藍染めの色調が重んじられてきた東京圏では白紺一色染が伝統的に愛好され、特に浴衣では型付の難しい柄の一色染が好まれてきた。

・差分染 一回の型付と注染工程で、多色の染料を色分けして染める技法。糊筒で色ごとに糊の堤防を作り染料を注ぎ分ける（例2-5《黒猫 松屋製》【図2】）。細かな差分染には必要箇所に適量の染料を導くために「突き棒」という棒状の道具を使う。突き棒は丁寧な仕上がりを追求し用いられてきた東京特有の道具である。

・ぼかし染 明瞭な境目をつけずに一度に異なる色の染料を注ぎ、「ぼかし」を表現する技法。コントロールしながらも染料の自然な浸透に委ねる注染ならではの表現方法である（例同前）。下絵を見てぼかしの境の目当てを定める。境に糊の堤防を引く場合もあるが、東京では堤防を作らず職人の手加減のみでぼかすこともあり、その分、技術力が求められる。

・細川染 一度染めあげて水洗、乾燥させてから、再度型付と染めを繰り返して多色染めする大変手間のかかる技法（例1-8《株式会社 服部時計店》【図3】）。三回染めする「三遍細川」も行われる。一回目の染めを終えた生地は、若干の収縮が避けられない。一回目の柄に二回目の柄をはめ込むように位置合わせをする「ハマリ細川」の型付は大変難しく特に熟練を要する。

以上のように、東京の注染では、より緻密、繊細な染め上がりを追求する傾向が強く、これに見合った技術、道具が継承されてきた。

(2) 江戸東京における注染技法と注染業の歴史展開

江戸における注染技法の起源については筆者の旧稿「江戸東京の誂え手拭の文化と「注込み」染めの登場」（2011年）⁷で論じたが、他産地との関係など未整理な点が残し、また幕末期から近代への注染業の連続性については未検討であった。一方、拙稿「東京中形浴衣の近代化と注染の展開」（2022年）⁸では明治末から昭和初期に至る注染浴衣地の技術、意匠の発展、位置付けの変化について論じたが、手拭い染注染との相互関係は論じていない。以下では、江戸における初期段階注染技法の他産地との相対的關係、近代の手拭い染とゆかた地製作の相互関係を含め注染技法形成史の概要を改めて整理し、新たに幕末期以来の江戸東京注染業の系譜を示す。なお注染技法は古くは注込染、注染等と呼ばれたが、本稿では「注染」で統一する。

江戸東京における注染技法の起点として、深川の京屋という染物屋の老母が藍瓶に浸す従来の染め方（長板中形同様に生地表裏全面に防染糊を型付して藍に浸染する）では白地部分の多い手拭いを染めるのが難しかったところ、「染抜んとする模様回りの回りにばかり糊をして（模様の周囲のみ防

染糊を型付して)上から藍を注ぎ込む方法を工夫したことが、明治33年(1900)11月23日『都の華』40号所載「手拭の話し」に記されている⁹。京屋の子孫に関する記述から、この工夫が進められた時期は19世紀半ば以前と推定される。同記事の伝える技法の解釈はこれまでも論じたが、注染技法発祥の背景を考える上で重要な点を述べておく。

「手拭の話し」では、京屋の老母の工夫した染め方について、「模様周囲のみ防染糊を型付けする」方法に関する具体的な説明が十分ではない。「模様周囲のみ型付けする」とは後掲【図6】のような模様部分のみ彫った型紙を用い彫り抜かれた部分にのみ型付けすることを意味すると考えられる。また注染技法の特徴である生地を折り返しながら型付することへの言及がないが、この染め方が生地を折り返しなしに成立するかを検討すると、仮に生地を広げたまま型付するならば、長板中形の型付同様に長板上で生地両面に端から(部分的に)型付して糊を乾かした後、伸子張りした状態で染めていくことが想定される。引き染めならありうるが、「上から藍を注ぎ込む」には、染料が不要な箇所に戻らないよう部分的に型付した周囲に筒糊の土手を引くことも必要で、伸子張りした状態ではこの手順は現実的ではない。「模様周囲のみ糊を型付けし」「上から藍を注ぎ込む」方法は、生地を折り返しながら重ねて型付することを前提とすると考えられる。一方、生地を屏風たたみして染める方法は、古くから行われてきた「板締め」技法と共通する。一見斬新な生地を折り返しながらの型付は、江戸時代の染色業者にとって身近であった板締めから発想されたものと筆者は考えている。

同記事によれば、大阪で更に工夫し、フイゴを使い、手拭い2、30枚分(2、3反分ほど)一度に重ねても藍が深く浸透するようにした。東京ではフイゴを安物にのみ用いたが(数反まとめて染めるのは安価なものに限ったという意)、記事が書かれた明治33年(1900)時点では東京でも皆、フイゴを使うようになっていた。

フイゴ使用の注染の確立時期を推定する上で『明治十年内国勧業博覧会出品解説』所載、愛媛県の出産者上田利平による製法解説¹⁰に、白地手拭いの染め方として、型付後すぐに藍を注ぎフイゴで浸透させることが記されていることが注目される。同製法解説では藍地手拭いは形糊を置き乾かした後藍瓶に入れ染めると記しており、ここからも染料を上から注ぐ方法は白地部分が多く浸染が難しい意匠の手拭いの染め方として先行したことがわかる。これは型紙製作技術にかかわる問題である。1920年代に紗張型が登場する¹¹以前は、白地部分つまり型紙を彫り抜く部分が多い意匠では浸染できるように生地全体に防染糊を置く型紙を作ることが難しく、これを打開したのが模様周囲のみ彫った型紙で部分的に型付して上から染料を注ぐ方法であったと考えられる。

以上のように少なくとも江戸では19世紀半ば以前に、白地柄の手拭いを染める工夫として、藍による初期段階の注染が始まっていた。1877年、明治10年内国勧業博覧会が行われた時点では、少なくとも愛媛県でフイゴを使用した藍による注染が行われており、大阪でのフイゴ使用の注染もこの頃以前に遡る可能性がある。いつ頃から地染まりの手拭いも注染の方法で染めるようになったかは不明だが、「手拭の話し」が書かれた明治33年(1900)頃にはフイゴ使用の注染が型染め手拭いの標準技法となっていたとみられる。

フイゴを使わない初期段階の注染はフイゴ使用に先立ち定着していたはずであり、1877年より

早くに大阪や愛媛をはじめ他地域でも行われていた可能性が高い。その中でも比較的早期に江戸で工夫されたのだとすれば、その背景として江戸では藍染（浸染を基本とする）が愛好され、手拭いは藍染めに限るとされていたことが指摘できる¹²。同時に少なくとも18世紀後期以降の江戸では歌舞伎界や遊里を中心に手拭いを挨拶や披露目の配り物などとして誂え染めする文化があったため、文字や絵を紙上に認めた（あるいは木版で摺物とした）のと近い印象で表現できる白地意匠を藍で染めること、しかも新規意匠に即応すること（多数の版木が必要な板締めでは難しい）が求められたと考えられる¹³。なお江馬務によれば京では化政期頃から「友禅の方法」（型紙を使い生地両面に防染糊を置き刷毛で染めるか浸染し骨書きする）で手拭いが染められており、明治20年頃から「注込染法吹込方法」（フイゴを使う注染）に改まったという¹⁴。刷毛引きで染める染料を多用するのであれば、注染の方法をいちやく工夫する必然性はなかったと考えられる。

東京本染注染の伝統的工芸品指定申出に当たり、注染の各技法が確認できる早期の資料として天保期の錦絵、明治期の雛形等（一部を次章に示した）を示したほか、「100年以上前に東京で製作された例」として明治期から大正前期の手拭いの現存例を提示した。ここでも東京で活動した人びとの別注品に頼ることとなった。すなわち、細川染の例として《三遊亭円朝》手拭い（製作期1855年-1900年、江戸東京博物館所蔵、三遊亭円朝〔1855年円朝に改名、1900没〕の配り物）、一色染の例として《山陽道大正六・二東海道大正五・十一奥州街道大正六・九寿多有前橋》奉納手拭い（製作期1917年、同館所蔵、アメリカの人類学者スタールの納札仲間への配り物、1917年9月の奥州街道の旅の後、同年2月山陽道、前年11月東海道の旅の記念と合わせ作られたとみられる）、差分染の例として《古今菴志ん生》手拭い（製作下限1918年 同館所蔵、三代目古今亭志ん生〔1918年没〕が古今庵志ん生と改名していた時期の配り物）、ぼかし染の例として1-5《亀井戸》手拭い（推定製作期明治後期から大正初期頃 後掲【図7】）を提示した。

なおこれらのほか大正14年（1925）、銀座松坂屋で開催された「江戸時代納涼会」関連企画の展覧会出展品を収めた図版集『風流手拭合』（1925年）¹⁵には、維新前後以来の江戸東京の手拭い（大半は注染とみられる）の作例を多数確認することができる。

次に江戸東京での注染業の展開を追ってみたい。

斎藤月峯著『武江年表』享和年間（1801-1804）記事には江戸の地で手拭い染色業が行われるようになり、町に手拭店が登場したことが記されている¹⁶。中村重蔵「手拭の今昔」（1957）では、江戸では文化期頃から神田紺屋町周辺に手拭紺屋と染型付屋が集り、近代に継続したことを述べている¹⁷。幕末期神田の手拭紺屋が明治期以降の注染業に連続することは次に示す明治期の農商務省資料から明らかである。注染業の起点となった手拭紺屋の出現は江戸における藍による初期段階注染技法の確立と連動していた可能性が高い。

幕末から明治前期の江戸の手拭い染め業の様相を伝える資料として、農商務省による『農商工概況』明治18年（1885）版所載、「東京府下工業概況」中「第六十七染物」の項に、維新前の江戸の手拭染業は17戸、維新後は10戸とあるのが注目できる¹⁸。同資料は「専ら手拭ノ染製ヲ営ム者」を「手拭染屋」とし、裏地、中形類を染める「仕入染屋」、半天其他の色上げ等を行う「地細工染屋」と区別している。これは幕末期以来、江戸東京で中形（今日「長板中形」と呼ばれる技を主と

する型染業)とは別に、注染技法を用いた手拭い染業の産地形成がなされていたことの証左となる資料である。なお同資料には維新後に手拭染業が減少した事情として、明治5、6年より大阪染め手拭いが流行、東京では型付の際、糯米と石灰を混ぜた防染糊を用いるが大阪では糯米でなく赤土を用いるので「染価低廉」(東京の染賃は大阪の1.5倍)、このため東京は圧迫されたことが説明されている。ただし大阪染は「品質脆弱」なため東京地染が追々流行する見込みともある¹⁹。

この後、農商務省工務課編『工場通覧』2冊明治42年12月末日現在所載、明治42年(1900)末時点の東京の染色工場一覧には製品種類を「手拭染」とする18軒がみえる²⁰【表2】。うち13軒が神田区所在、創業が19世紀初期から半ばまでのものが、「文政年間」(川吉手拭染工場)、「100年前」(中文染物工場)、「50年前」(荒井手拭染工場)の3軒あり、また創業年月記載はないが武蔵屋も天保6年時点で営業していたことが別資料で確認できる²¹。東京の注染業は神田周辺地域を中心に幕末期から明治期へと受け継がれてきたことがわかる。

1900年代には注染の浴衣地応用が始まった。昭和初期に至る注染浴衣地の技術、意匠の発展、位置付けの変化について拙稿2022年²²で論じたので、その要点を述べる。

1900年代中頃、注染の浴衣地応用は大阪で先行し始まった²³。ただし簡単な柄の実用品であった。1900年代末頃から東京浴衣地問屋が手拭い染工場と協働、注染浴衣地製作に着手した。この時、問屋の注文を受け、浴衣地を染めはじめたのは前掲『工場通覧』【表2】で「手拭染」業に分類される染工場であった²⁴。

東京の浴衣地製作は専門の製造加工卸問屋が図案、型紙を調整し、型付、染色業者に染め加工が発注される。近代東京で行われた浴衣地型染め技法には江戸時代以来の「長板中形」のほか、「籠付け」「写し染め」、「風好(光)染め」さらには機械捺染などがあった。それぞれに特徴があるが東京の問屋が最も重きを置いてきたのは緻密に彫られた型紙で両面型付して染め上げる長板中形であった。長板中形と注染の技法は、型紙と防染糊で生地両面を型付して染料を浸透させ染め上げる点で共通性を持つ。

このような背景から、1910年代から1920年代、明治末から昭和初期にかけて、東京の業界では丹念な手仕事の技を追求する長板中形を理想として、注染の技術を磨き、図案を工夫し、注染浴衣地の水準を高めていった。1923年の関東大震災後、生活文化の近代化の進展や経済情勢など多様な要因を背景として、東京の浴衣地の主力が長板中形から注染に切り替わっていった。同時期、染工場の郊外移転等も重なり、長板中形の紺屋や職人の注染兼業、注染への転業が増え、東京の注染技術の質を一層高めることにつながった。1932年頃には、従来専ら長板中形を指した「本染」の呼称を注染浴衣地にも使うようになる。このことは手仕事の技を極める姿勢を長板中形から受け継ごうとする東京の業界の意識を物語っている。

さらに、明治末から大正、昭和初期にかけての注染の浴衣地応用、質的向上と並行し、注染手拭いも洗練されていった。技術面では使用する合成染料の種類のが浴衣にも手拭いにも新たな色彩表現をもたらした。これらの状況については次章で作例を通し示す。

また大正後期、1921年から26年にかけて特許取得された紗張型²⁵により、従来の糸掛け型、糸入れ型では型紙製作が困難であった白地に柄が点在する図案が、制約なく染められるようになった

た。ただし紗張型は、特許保護期間中であった昭和戦前期まではコストの問題から、特に手拭いへの利用は一部に限られ、広く普及するのは戦後復興期以降となった。また1928年頃には東京の染色業者山崎文治により注染台染料吸引装置が発明された²⁶が、これも一般の染工場への普及は戦後復興期以降であった。

2. 出展作品にみる近代東京注染の技と意匠の系譜

伝統的な東京の注染技法は、一度に型付して染める反数が比較的少なく、突き棒を使うなど丹念な作業により繊細な染め上がりを目指す点に特質がある。このような特質が形作られてきた要因として、前述のように東京の業界が注染浴衣地研究に取り組む中で長板中形技法の繊細緻密な手仕事を範として技を追求する価値観が共有されてきたこと、また手拭いと浴衣地製作相互の影響関係があると考えられる。さらに特に手拭いにおいては、別注品対応が注染初期段階から技法形成を促した可能性があり、以後も技術力の錬磨に影響を与えたのではないか。以下では、展示コーナーⅠ、Ⅱへの出展資料により、これらのことを再検証したい。

(1) 製作資料と作例からみる近代東京本染注染の歴史

1) 明治大正期東京の別注手拭い製作資料

①手拭い雛形

東京では明治期から別注用の詠えの参考として手ぬぐいの雛形（意匠見本）が出版されてきた。これらは基本的に多色刷りのため、各時期の意匠について想定技法を含め把握できる。

明治19年（1886）8月版の1-1香得案「しん板手ぬぐひづくし」は魚河岸や講による詠えを想定した手拭い、奉納手拭い、掛け紙などの意匠が木版多色一枚摺の形で示されたもので、おもちゃ絵のような見かけだが現実の注文の参考にもなる。手拭い意匠には一色染、差分染、細川染、ぼかし染の例がみられ、明治19年時点で注染の4技法が東京において行われていたことが確認できる²⁷。「画工兼出版人日本橋区馬喰町三丁目井上茂兵エ屋号いせも」とあり、浮世絵版元が手拭いや掛け紙の下絵を扱う例があったことを示唆する資料としても注目できる。

一般的な手ぬぐい雛形は冊子体であり、昭和戦後期まで多数出版されたが、現時点で筆者が確認できた中で最も早いのが明治33年（1900）版1-2『手拭印半纏雛形』である。奥付に編輯印刷兼発行人神田区松枝町中村桂太郎、発売所中金とあり、『工場通覧』（前掲【表2】）に登場した神田の中金染工場の発行とわかる。掲載手拭い図案全てが注染の一色染、差分染、細川染、ぼかし染いづれか一つ以上の技法による。配色は浅黄（薄藍色）や紺を主とし一部に柿色（茶色）を加える程度で、揺るぎなく藍系の色が好まれ、精緻な筆書きの図や掠れ文字など型紙制作と型付に技術力を要する繊細な図案が多い。「魚がし」手拭い【図4】や酒の銘柄の手拭い等実作に基づくと思われる例も含まれる。実作例の掲載は以後の東京の手拭い雛形本に継続する特徴で、秀作を参考に独自意匠を詠える別注制作の文化が継承されてきた様子がわかる。

②「大丸御店様」注文控え帳

1-3「大丸御店様」注文控え帳（仮題）は明治43年から大正元年（1910年～1912年）の日付記載のある別注手拭い注文控えを綴じた帳面で、表紙に「明治四拾参年 一月吉日(大)御店様」と墨書がある【図5-1】。(大)御店様は老舗呉服店大丸東京店（明治43年10月末本店閉店後は東京出張所糸扇店）であり²⁸、東京の専門業者が同店から受けた注文の記録と考えられる。横本型袋綴じで、各丁表裏に2件ずつ、別注手拭いの注文者名、図案概要（略図を描き、差分染の配色やぼかし等注意書きを添える）、大丸側担当者名、受注日と納期、整理番号、反数、「白地」「細川」「半染」等の種別が記され、一部に形代、染め代の記載もみえる。今日でも別注手拭いの注文は、百貨店や呉服店を経由して専門業者が受け、型紙、生地、染め加工の一切を調整し製作する形がとられているが、明治期から同様であったことがうかがえる。注文者の大半は東京周辺の商工業者であり、この記録から明治末期頃の東京の別注手拭いの意匠と技法、製作状況を具体的に把握することができ、注文主の意向が汲み取りやすい例を取り上げ、その一端を示す。

- ・「家康印発売元 神谷糸店」（細川染、大正元年8月11日受注）【図5-2右】 家康印発売元の糸店の注文である。商標にちなむ葵に商売ものの糸を絡ませ、「色は濃くもうけは薄き糸うりの細くもながく続くなりはひ」という歌を添える。葵はコン（＝紺色）、糸はウス（＝薄青色）で白地の細川染とし、文字部分も含め繊細な型を使った意匠である。
- ・「向嶋 奥植半」（白地一色染、明治43年3月30日受注）【図5-3】 向島にあった有名料理屋「奥の植半」の注文である。同店名物の蜆の蕪苺に「おく植はん」の名札を付け下印代わりとする。蕪苺の線はかなり細く描かれており、白地にヌキ（＝青）の一色染だが、繊細な意匠と見受けられる。
- ・「諸官庁御用達 鍵屋」（白地細川染、大正元年12月受注）【図5-4】 両国の老舗花火店、鍵屋の注文である。両国橋上空に昼花火の「旗物」（パラシュート式の旗を出す）と夜の花火を重ねてあらわしている。旗はコンとウス、夜の花火は柿色で三色遣いの細川染とする。住所を入れた下印は屋形船を象っている。
- ・「甲馳（こはぜ）製造 山田」（白地差分染、大正元年8月11日受注）【図5-2左】 足袋などに使うコハゼ製造業者の注文である。右上の瓢箪型に「本緑壺」とあるのは本所緑町一丁目（住所）を示す。「甲馳製造」の印（コン＝紺色）を中心に、斜めに置いた山形に「タ」の字繋ぎ（ウス＝薄青色）で「やまだ」と読ませ、一種の判じ物意匠となっている。この部分の二色に加え、ヌキ（＝青色）、チャ（＝茶色）と四色を使う差分染である。

本資料にみえる商工業者の別注手拭いには、これらのように商売に関わる絵柄、文字、言葉を示す、意味を読み解かせる判じ物趣向など、メッセージ性のある独自意匠がそれぞれに工夫されている。細川染、多色差分はもちろん、一色染でも繊細な線の表現など、技術力を要する選択を良しとする価値観も見受けられる。

力士、芸能関係、花柳界からの誂えもみられ、商工業者とは異なる配り手拭いの文化もうかがえる。芸能関係で繰り返し登場する例に長唄三味線方杵屋和三郎の注文がある。意匠は杵屋の定紋丸に三つ杵と名にちなむ「和」の字等を市松型に配置し白地に青で一色染したもので、名前や紋に依

ることが多い芸能界の手拭いの典型である。この頃和三郎は立三味線として歌舞伎公演に出演していたが、大正元年（1912）10月には、急なことだったのか9日受注で納期は10日中という記録がみえる【図5-5】。代金は「拾五反切りタタミ」（この時代は通常反物のまま納品）で「九円受取」、前掲「甲馳製造 山田」は同じ反数で「壹円五十銭」だったので六倍の料金である。楽屋での返礼用とみられ、超特急料金を払っても手拭いは欠かせなかったことがわかる。

また一部に群馬、長野など地方の商工業者や旅館等からの注文もみられ、東京が手拭い製作の本場と目されていた様子を知ることができる。

③注染手拭い型紙（糸掛け型）

1-4「紅葉館 鹿沢温泉小林亀蔵」注染手拭い型紙【図6】は糸掛け技法による型紙である。ほぼ同柄の白地差分染手拭いが前掲1-3注文控え帳にみえる（「小林亀蔵 紅葉館」明治43年3月20日受注 図5-6）。注染手拭いで白地の一部に文字や文様を染める場合、紗張型普及以前はこのように柄の周囲のみ彫り抜き細い生糸で型を吊るよう固定した糸掛け技法による型紙が使われた。型付工程では彫られた部分のみ防染糊が生地に付着する。注染工程では糊を置かない白地部分に染料が回らないよう型付した周囲に糊の土手を引いて染料を注ぎ、白地柄を染め上げる。

2) 明治、大正、昭和戦前期東京の注染手拭い

コレクション中の東京製と考えられる注染手拭いのうち、明治から大正期の製作と見られるものは稀少であり、次の2点を展示した。

- ・1-5《亀井戸》（細川染 明治後期から大正初期頃）【図7】 藤の名所として知られる亀井戸（亀戸天神）の土産手拭いである。地を薄藍で染め、再度型付し、藤の花にはぼかしを加えながら濃色で染めている。この濃色の色味は東京で「うしほ染め」の商標で売り出された輸入バット染料「インダスレン・ブリュー」によるとみられ、ここから年代を推定した。「うしほ染め」は明治36年頃から使われた。鮮やかだが単調な色調のため流行は続かなかった²⁹。
- ・1-6《内国通運》（差分染 明治から大正期）【図8】 白地中央に㊦を黒地白抜きで染め、Eの字を変化させた飾り枠で囲んでいる。このしるしは明治8年（1875）、内国通運会社が前身の陸運元会社から社名変更した際に制定された社章（赤地白抜き㊦の左右をExpressのEで挟む）³⁰に基づく。社章の色を取って黒に変えている点からも東京製と判断した³¹。下印（下部に染める名前部分）は駅鈴（律令制下、官命により旅行する者に下付された鈴）を象った枠に社名を入れたもので、江戸時代の定飛脚問屋に由来する同社の矜持が読み取れる。

1-6【図8】のように白地の中央に事業に関する絵柄や社章、社名、屋号等を染めて下印を添えるものは明治期以降の手拭い雛形本に類出する配り手拭いの基本構図であり、前掲【図6】のような型紙を用い白地の一部に型付して染められた。

一方、東京で出版された手拭い雛形本を辿ると大正後期以降には大手呉服店図案部をはじめ図案家の参入がみられ³²、近代的な感覚の意匠が登場し始める。また紗張型の使用も意匠の自由度を高めることになる。一般的な商工業者の配り手拭いは次章で取り上げることとし、ここでは昭和初期頃製作の別注手拭いのうち高い水準で創作性が追求された例に注目する。

- ・1-7《日本郵船》（差分・ぼかし染 大正後期から昭和初期頃）【図9】 「COMPLIMENTS」（贈

呈)の文字を添え、海外顧客を意識した配り物とみられる。月下の帆船図は川瀬巴水作品を思わせる。樹木と帆船のシルエットの写実性と、月影を浮かび上がらせるほかしの対照は型染めの緻密さと染料を注ぐことにより生まれる揺らぎ感を併せ持つ注染の美を引き出している。

- ・1-9《川奈ホテル》(細川・ほかし染 昭和11、12年頃)【図10】伊東の川奈ホテルの宿泊客へのみやげ用手拭いである。グラフィック系の図案家によると思われる数色の色面で構成した風景図だが、遠近感の強調された細部にはゴルフコースでプレイする女性、吊り橋などが緻密な細川染(三遍細川)で染め出され、遠く大島の噴煙もほかし染めされている。微細なモチーフを自在に表現した意匠は紗張型使用を前提にしたものと考えられる。同ホテルの昭和11年(1936)開業間もない頃の顧客への配りものとみられ、13年の綿製品経済統制開始前、戦前期注染の意匠と技術の到達点を示すかのような作品である。

昭和初期頃には著名企業等の別注手拭いとして、これらのように質の高い創作性を持ち高度な技術で染められた作品が登場する。製作現場全体にかかわる背景として、大正末から昭和初期には画家や図案家による図案を優れた技で染めた「趣味の手拭い」(芸術性のある鑑賞主体の手拭いをこのように呼んだ)の製作が盛んになったことがある。これについては別項でとりあげる。同時にこれらの手拭いにみられる超絶技巧ともいべき繊細な細川染や、合成染料を駆使した微妙な色味の表現は、同時代の浴衣地注染の高度化とも重なっている。

3) 昭和初期の別製注染浴衣

東京の中形問屋による注染浴衣地製作は大正後期以降急拡大していった。東京の浴衣地の主流が長板中形から注染に切り替わっていった背景には前述のように様々な要素があるが、技術面では大正後期以降の濃藍色のバット染料の導入が転機をもたらしたことが伝えられている³³。バット紺地染まり一色染の1-20《洲流し風文様》浴衣地反物、三勝株式会社製は、その頃の柄を戦後復刻染めしたものである。さらに大正末昭和初期には紺系以外の多様な色彩が浴衣地に広がる。白地に藤色一色染の1-14《破れ亀甲に撫子》浴衣地反物は、藤色を注染浴衣地に使い始めた当初のものである。

昭和初期の別製浴衣地には長板中形を範とした型付けの精緻さとともに合成染料利用技術の高度化がうかがえる。銀座の松屋呉服店の流行発信の催し「松美会」展覧作品を例示する。

- ・1-22《花菱に松葉流れ文様「旅情」》浴衣地見本、丸久商店製(クレア、一色染 昭和8年)【図11右】『松屋グラフ』昭和8年(1933)5月号に掲載された³⁴「松美会」のための別製品である。ごく薄手の縮み地に花菱を地詰めした中に緩やかな松葉の流れが連続している。白地に紺の長板中形かと思ふが、淡い水色に無地染めした上に注染で染めている。
- ・1-15《抽象文様 松美会銀座ゆかた》浴衣地反物(細川染 昭和初期)【図12】「別染 松美会銀座ゆかた」と印刷した札を付け専用文庫に収められている。白地に紺、青で染めた大ぶりの幾何学的意匠だが、青地に配された赤紫色の掠れた横筋は抜染した中に染めたものとみられる。

このように昭和初期東京の逸品注染浴衣地には、繊細な技の追求という点で長板中形に迫りながらも注染ならではの技術の高度化、洗練がみられる。意匠には古典的な型の継承から離れた創作

性、近代性があり、図案制作の充実がみてとれる。注染浴衣図案制作の展開については別途検討しているが、型染め浴衣の図案は伊勢型紙業が型紙制作の一環として統括してきた経緯があり、大正期の東京では型紙商から図案業の派生がみられること、他方、大正末昭和初期には従来の職人的図案制作への批判と「生活の芸術化」の思想を背景に芸術家主導の創作図案浴衣企画ブームが起こり、職業図案家をも巻き込み、特に注染浴衣において図案変革のきっかけとなったことが指摘できる³⁵。

昭和初期には職業図案家による浴衣図案への近代的感覚の広がり、画家をはじめ様々な芸術家の図案による創作図案浴衣企画が併行している。展示作品中、子ヤギと笛吹きが踊る絵柄の1-24《童画文様》浴衣地見本、丸久商店製【図11左】は、『松屋グラフ』昭和4年（1929）、夏の染織松美会号、同昭和5年浴衣号掲載の童画家岡本帰一図案こども浴衣地³⁶と一連の作品とみられる。1-25《政治家似顔》浴衣は風刺漫画風似顔散らしの意匠だが、文藝春秋社による昭和4年（1929）《文壇の華浴衣》岡本一平考案「三頭首」など、類似例を確認することができる³⁷。

4) 戦時体制と注染手拭い、浴衣

技術、意匠とも高みに達した注染手拭い、浴衣地であったが、昭和12年（1937）7月、日中戦争が勃発、民需用綿製品はいち早く経済統制の対象となる。昭和13年（1938）6月29日に綿製品の製造、加工、販売を制限する商工省令、また繊維製品販売価格取締規則が公布され（あわせて「非常管理令」と通称された）、7月21日には糸番手の低い（太い糸を使って織られた）実用品（通常の手拭い用晒地はこれに当たる）と、それ以外（浴衣地はこれに当たる）を分け、後者のうち製造済の小幅綿織物（浴衣地等）は届け出により加工卸売りが許可されることとなった。手拭い地を含む前者は同年9月26日以降「特免品」として製造再開、加工、販売が継続した³⁸。しかし原料不足から代用繊維混用の特免織物さえも入手困難になっていく。

1-21《鹿子入り大麻の葉文様》浴衣地、三勝株式会社製【図13】は、長い型送りを活かした大胆な構図の麻の葉文様の細部（小花部分）にはまり細川で差し分けするなど繊細な技を駆使して染めた華やかな反物だが、「東京府/13.12.18/許可」の販売許可検印が捺されている。一方、1-10《一億一心》手拭いは、昭和14（1939）年4月、国民精神総動員委員会総会で決定された基本方針中の表現に基づく国策標語を染めたものである。

木綿生地が欠乏する中、手拭いや浴衣地は、子どもの襦袢などに使うことに備えて家庭内でストックされた。1-26《戦争柄手拭い浴衣》は、上空に戦闘機、地上では戦車を背景に銃を構えた兵士が日の丸を掲げて突撃する図と軍歌「進軍の歌」（昭和12年）の一節を染めた木綿地手拭いを縫い合わせたもので、物資統制が厳しくなる以前に染めた手拭いを、後に湯上がり用浴衣に仕立てたものとみられる。

木綿製品の経済統制が完全撤廃されるのは戦後、昭和26年（1951）7月であり、ここから注染手拭い、浴衣地制作は復興、昭和30年代に戦後の最盛期を迎えた。一般商品と同時に別注品が復活、凝った染め方と意匠を楽しむ趣味の手拭いも再び製作されるようになった。

(2) 昭和初期「趣味の手拭い」にみる意匠と技の連携

大正末から昭和初期には、創作性を追求した鑑賞主体の手拭い製作が盛んになる。意匠創案は誂え染めの要であり、江戸後期から明治期には意匠創案自体を遊びとして楽しむ「手拭い合わせ」も行われていた。そのような過去からの継承と、同時代における図案への意識の高まり、また趣味人たちの交流などが重なったところに、「美蘇芽会」をはじめとする「趣味の手拭い」の気運が高まったとみられる。美蘇芽会での用語に倣い鑑賞を主眼とした創作図案手拭いを「趣味の手拭い」と総称しておく。ここでは概要紹介にとどめ、これらについては別途詳細に検討したい。

1) 趣味手拭いの会「美蘇芽会」

「美蘇芽会」は大正末から昭和初期に活動した「趣味手拭」の会である。大正14年(1925)、大連の中林峯昇により「大連蒐集会」として創始され、中心人物の一人、趣味人集団「我楽他宗」を率いる三田平凡寺によって翌年「美蘇芽会」と改称された。大連、東京、京都、大阪など各地の手拭い愛好者が参加、会員の出題による創作手拭いを共同制作するほか、昭和3年(1928)からは会誌『佳芽乃曾記』が刊行され、これにより活動を辿ることができる³⁹。「美蘇芽会」の一連の活動は、昭和初期に鑑賞を主眼とした創作手拭い(趣味の手拭い)が盛んになるきっかけとなったとみられる。製作は大正15年(1926)2月以降、東京日本橋の松山手拭店が手がけ、図案の多くは東京の図案家宮川柯月園、東京の画家鈴木祥湖、松田青風らによる。「江戸東京趣味」が地域を超えて共有されたともいえそうである。2-1《山の幸》【図14】は、第42回、昭和3年9月の作品で、浴衣に使われる薄物の綿縹生地に宮川柯月園図案の野葡萄図を染めたものだが、鼠色の巧みな濃淡ぼかして陰影を表現して葡萄の葉と蔓を立体的に見せ、わずかに藤色を加え、実の色づきをあらわしている。染め職人の絵心あつての染め上がりである。

2) 松屋製趣味の手拭い

昭和戦前期、東京の松屋呉服店(現、株式会社松屋)で製作された趣味の手拭いである。東京の大手呉服店(百貨店)ではオリジナル意匠の手拭いが製作販売されていたが、この松屋のシリーズは、差分やぼかし染など注染の持ち味を活かした斬新な構図が工夫され、色数を絞りながらも印象的な作品が多い。2-5《黒猫》【図2】は、菱田春草の「黒き猫」から引用したと覚しき木漏れ日の中の黒猫をあらわすが、猫の体にぼかしを加えて立体感と毛並みの艶を感じさせ、周囲の地染まり部分の縁の不規則な形状は葉影のようにも見え、巧みな図案と配色、差分、ぼかしだけで高い表現効果をあげている。

3) 松田青風筆「十二月劇画手拭」

日本画家、松田青風の下絵による、歌舞伎を主題とした手拭いと木版掛け紙のシリーズである。各作品には青風による解説が添えられており、昭和8年(1933)3月から翌年にかけて頒布されたことが確認できる。松田青風は鎗木清方の門人の一人であり、歌舞伎役者似顔や、舞台スケッチも手がけた。製作は「美蘇芽会」手拭いと同一日本橋の松山手拭店である。12ヶ月の全作品が極めて緻密な細川染で表現されている。一例として、2-11《第3回「鳶奴」》【図15】をあげる。初鰹を鳶にさらわれる奴が踊る所作事「鳶奴」を主題とし、縦遣いの構図上部に鰹を掴んだ鳶の足だけを大きく、下端に遠景として火の見櫓と家並みを小さく描き、鳶が江戸の町の空を高く上がってゆ

く様をあらわしている。鳶の足の骨描きが細川染でピタリと見事にはまっているだけでなく、解説には、鯉は「藍ばかり三度使って試み」（型紙を三枚に分けて型付と染めを三度繰り返す三遍細川で染めた）とあり、極めて精緻な細川染めにより、自然な表情で絵画性が再現されていることがわかる。原画に即した染め上がりを実現するため松山手拭店が努力を惜しまなかった様子はその他の作品の青風による解説からもうかがえる⁴⁰。

このシリーズのもう一つの見どころは、手拭いと呼応した掛け紙の洒脱な意匠と木版刷の美しさである。「鳶奴 掛け紙は奴の釘抜紋入り法被と鯉に添えられていた熊笹の意匠である【図 15 右】。戦前期までは実用の配り手拭いにも木版摺の洒落た掛け紙が使われていた。

松屋の趣味の手拭いシリーズでは無理な手数をかけずに注染ならでは技法を活かし最大限の効果を引き出すことがはかられている。2-5《黒猫》はその典型である。これは図案制作者自身が型紙製作や染め技法について熟知しているからこそ可能であったと考えられ、職業図案家の仕事ぶりがうかがわれる。一方、松田青風筆「十二ヶ月劇画手拭」では、画家自身も注染技法で染めることを意識して原画を描いているが、適う限り原画を再現することを目指して型紙や染めの職人との間を調整する役割を松山手拭店（同店は染工場ではなく手拭い専門店）の店主が果たした。鑑賞に値する「趣味の手拭い」作品は、工程を把握している職業的な図案業の存在、または原画を最大限活かすべく注染技法への置き換えを考え、職人への橋渡しをする監督者の存在が必須であり、さらに注文の意図を汲んでかたちにできる型紙製作、型付、染めの職人の技が揃って初めて成り立つものであった。

3. 別注品製作にみる意匠への意識－昭和期以降の企業、商工業者の配り物を中心に

(1) 東京における別注手拭い・浴衣地製作

昭和 20 年代末から別注製作の仕事が続けてきた豊田満夫氏は、別注製作最盛期の様子や芸能界での慣習などについて熟知されている。数度にわたり筆者が豊田氏から伺った、東京での別注手拭い、浴衣地製作の概要を以下に示す⁴¹（カギ括弧は豊田氏の言葉の引用）。

豊田氏が戸田屋商店に入社したのは綿製品の経済統制が撤廃された翌年の昭和 27 年、「手拭いに勢いのつき始めた頃」で、「28、9 年頃、会社のあつらえ手拭いの注文が多くなり、30 年過ぎると一般の人たちも作り始め」た。正月の配り手拭いは商工業者に限ったものではなく「下町では、お店の他、個人でも作り」、「町内のお正月の挨拶に、みな手拭いを持って回りました。」。「昭和 37、8 年、40 年頃まではお正月の挨拶には手拭いが一般的」で、「石油ショックの頃」（昭和 49 年、1974 年の第一次石油ショックの頃）から配り手拭いが減った。その理由として「挨拶に限られたところに絞られるようになった」こと、「お正月に家を空けて出かけることなども始まった」ことを豊田氏は挙げている。

配り手拭いが盛んだった時期には「11 月になると出入りの百貨店の呉服売り場に『手拭い承り所』を作らせてもらい、多い時は 1 日 90 件ほど注文を受け」、「注文が集中するので、大口のお客様には 9 月頃から回って、先に注文をいただく」というほどであった。

一方、配り手拭いを年中使う生業もある。その一つに深川周辺に多い材木問屋があり、「大工さんに名刺代わりに渡す。材木問屋は玄関に手拭いが積んでありました。」という。また芸能界でも返礼等の挨拶用に手拭いは通年使われる。「歌舞伎では普段から楽屋見舞いのお返しにします。襲名披露の配り物でも手拭いは扇子と一緒に必ず使います。俳優さんや歌手の方が舞台などに出演する時にも配り手拭いをあつらえます。後援会、ファンクラブなどへのお返しのほか、共演者同士の挨拶に、マスコミ関係者に宣伝として配るようです。」という。

誂え染めの浴衣地も挨拶の配りものに使われた。浴衣は冬でも楽屋着にするため「俳優さんは座長になると公演と一緒に出演する仲間内に浴衣を配りました。今でも一部に続いています。」。歌舞伎界では「襲名披露公演には必ず浴衣を作りました。」。襲名披露の挨拶の配りものである扇子、手拭とは別で、「浴衣は裏方の人たち、公演と一緒に出演する仲間内」に配るものであったという。豊田氏によればこれには公演を自分のものとして盛り上げる意味がある。

また相撲界でも配り浴衣は一年中使われる。「谷町の人たちに御礼に渡す。もらった方では御祝儀を渡すことになります。仲間内とか若い人にあげたりもします。」。

さらに一般企業でも別注浴衣を作っていた。「暑中見舞に、ビルの新築祝いなどでもお土産として浴衣地を配ったり」「洗濯機うず潮の景品に浴衣がついたり」した。「大企業でもやりましたが、まして中小企業ではなお盛んで、昭和40年代までが最盛期」であった。「それだけ庶民に浴衣や手拭が求められていた」のだと豊田氏は語っている。また会社のお揃いの浴衣を作って、地域との交流と宣伝をかねて、盆踊りに出ることもあったという。

別注品の図案はどのように調整されたのか。

「商店の手拭いの場合、初期はオリジナルのものが多かったです。小売業の人たちは、大抵自分で考えて持ってくる。町内の八百屋さんや魚屋さんはお互いにライバルのように競いあいました。」「初期」とは前述のように昭和27、8年頃から30年代にかけて配り手拭いが復活した当初を指す。ただし世の中が忙しくなると、出来合いの図案でやる人が増えたという。

歌舞伎役者の手拭いの場合、家の文様や紋による意匠だが「特に襲名の配り手拭いは先代の時と同じ図案を受け継ぐことが多い」という。「普段の楽屋用は面白いものを新たに作ろう」ということもある。演劇の俳優は「デザインのこだわりがある人、おまかせの人」多様である。相撲の浴衣の柄は自由で、本人がサインを書いてそれを染めることもある。

新しい図案を作る際には、「お客様がアイデアを持っている場合は、それにあわせて下絵を用意し提案する」、あるいは「こんなことを仰っているのだらうな」と、豊田氏から具体的な案を提示することもある。

以上の要点を整理する。

1. 別注手拭いは、綿製品統制撤廃の翌年、昭和27年（1952）以降、企業、一般商店に順次復活、一般個人にも自前の手拭いを作る例があり、主に正月の挨拶に使われた。ただし生業によっては年中使われる。正月の配り手ぬぐいは昭和40年代末、1974年頃から減少した。
2. 一般商店などの手拭い図案は元来依頼主自身の創意に基づく注文が多かった。商店の注文に限らず、依頼主は下絵原稿を必ず用意しなければならないわけではなく、アイデアがあればそ

れにあわせ製作者が下絵を調整した。

3. 芸能界での別注手拭いは、歌舞伎界では楽屋見舞いの返礼、襲名披露の配り物に使われ、意匠には約束事もある。各種ショービジネスでは公演の際の挨拶や御礼、また宣伝に使われる。
4. 別注浴衣に関し、芸能、相撲の世界では独自意匠の浴衣地を誂え、楽屋内、仲間内の配り物とする慣習がある。相撲界では浴衣地は返礼品とされる。
5. 企業でも別注浴衣を配り物、景品に使った。企業の別注浴衣地製作も昭和40年代までが最盛期だった。

別注手拭いに関し、宣伝の意味を持たせた配り物とすることは他地域でも広くみられたが、東京では手拭いは少なくとも明治期には年玉（新年を祝う贈り物）の代表格となっていた⁴²。これは関西圏にはない東京圏手拭い文化の特徴である⁴³。年始の挨拶としての手拭いの遣り取りは戦後も再興し、規模が縮小したとはいえ、今日でも問屋、型紙業、染工場等の注染関係業、伝統を重んずる老舗等によって続けられている。そのような中で明治期の手拭い製作資料にも確認できた、独自の意味を込めた意匠を求める姿勢が引き継がれ、東京の別注手拭い、また別注浴衣地制作の文化、ひいては注染による物作りの特質を形作る一因となってきたのではないか。

(2) 別注品にみる意匠への姿勢

以下では企業、商工業者らによる昭和期の別注手拭いの作例を中心に、配り物などの別注品製作において誂え主たちが意匠に求めてきたもの、託すものを捉えてみたい。

1) 企業、商工業者の配り物

① 大手企業の手拭い、浴衣

昭和戦前期には、前掲1-7《日本郵船》【図9】、1-9《川奈ホテル》【図10】のような高度な技巧を伴う創作性の高い作品が、著名企業の大切な顧客への配り物として作られたが、企業の一般的な配り手拭いには次のような意匠の系統が見いだされる。

一つは少なくとも明治期以来行われてきた、いわば古典的な意匠の系統である。前章で示した1-3「大丸御店様」注文控え帳の例【図5-2、5-3】、1-6《内国通運》【図8】のように事業に関わる絵柄や社章、社名等を端的に示すものが代表格だが、これと並び吉祥文様を中心とした類型も明治期から続いている。3-2《西川》【図16】は、老舗寝具メーカーの老舗、西川の昭和戦前期の手拭いであるが、唐草文様に、牡丹文字（牡丹の花弁のように線を波打たせ丸く形作った飾り文字書体）の「西川」を散らしている。唐草は永続性を、唐草を構成する小円は貨幣を、牡丹は豊かさを示すとされ吉祥尽くしである。また3-1《三越呉服店》は、線がどこまでも続くので永続性を象徴する紗綾形文様を「半染」（後述）の構図であらわしたもので、これも典型的な吉祥意匠の系統である。唐草、紗綾形、牡丹文字等は明治期以来の手拭い雛形本に類出する。これら吉祥の意匠は繁栄を寿ぎ、めでたさを分かち意味合いで用いられてきたと考えられる。

これらに対し、大正から昭和初期には、広告美術の発達とともに印刷物の広告図案に通ずる表現で商品や商標等を示す新たな意匠の系統も登場する。3-4《マツダランプ》（差分染 大正末～昭和初期）【図17】は、東京電気（東芝の前身）を代表する製品「マツダランプ」の手拭いである。特

有の書体（ロゴタイプ）と「マツダ」のロゴマークは紙媒体での広告に使われているものと同じで⁴⁴、象が電球に乗ったユーモラスな図は切れにくいことの寓意と思われる。3-3《蜂ブドー酒》（差分染 大正～昭和初期）も、ロゴタイプを用い瓶に貼る商品ラベルに似せた構図を取り入れており、この系統といえよう。これらは印刷媒体への広告やパッケージ等と連動した広報機能を果たす意匠といえる。

戦後復興期以降になると、大手企業の手拭いには、古典的な意匠の流れも続いてはいるが、広告やパッケージのデザインと共通する感覚の意匠が主流となり、商品のロゴタイプや広告イラスト等の転用が目立つようになる。代表的作例として3-7《Peace 御進物にたばこ》（差分染 昭和中期）【図18】、昭和27年（1952）に刷新されたレイモンド・ローウィによるPeaceのパッケージデザイン⁴⁵を中心に据えた専売公社の手拭いがあげられる。ユーモラスな表情でたばこの煙をくゆらす紳士の帽子とPeaceパッケージを一体化し、差分技法を活かすよう構図には省略を効かせる一方で、「cigarettes」の文字や鳩のイラストの細部は極力崩さずに写している。本物のパッケージは背景の紺色に対し「Peace」の文字は白抜き、鳩と「cigarettes」は金彩だが、手拭いでは無理に細川染の手数を加えることなく、社会的注目を集めたパッケージデザインの印象を再現している。注染では染められる線の細さ、差分の色の間隔に制約があるなど技法把握に基づく図案の調整が必要である。写真的なコピーではなく、注染技法の持ち味を活かして考えられた図案の好例であり、技法に通じた職人的な図案業あるいは型紙業の関与により実現したものと考えられる。

同時代的な広告美術の感覚で、手拭いのために創作されたとみられる作例もある。3-8《でんつう》（昭和中期）【図19】は横遣いの手拭いをニュース速報の主役だった電光掲示板に見立て、「でんつう」の文字を点滅するかの如くりズミカルに配置したもので、グラフィックデザインの視点をもって手拭い本来の遊び心のある意匠が生み出された例といえる。

戦後期にも老舗企業の特別な配り物には、独創性を重んじた創作意匠がみられる。8-10《日本橋白木屋》は、横遣いの中央に日本橋の欄干を据え、名物の白木観音と名水を左と右に、いずれも写実的に描き、伝統と現代性の融合を示すかのような意匠である。3-6《創立八十周年 三井銀行》（1955年、三越製）【図20】は芹澤銈介の下絵による（豊田氏による）、三井銀行の創立80周年記念の配り物である。薄青地に鶴の姿に見立てた文字絵の「寿」と松竹梅を白く染め抜くが、型絵染風の効果を狙ってか細部に濃青のぼかしを加えている。戦後、民藝系作家が注染作品を手がけるようになる流れとも関わり、注目したい作品である。

また、豊田氏が語っているように戦後昭和20年代末～40年代頃には企業の夏季の配り物として浴衣地が製作されていた。豊田コレクション所蔵品にも、ビール、家電、自動車から、写真フィルム、広告代理店まで幅広い業種の浴衣地がある。展示したうち、三輪自動車ミゼットをロボット風にキャラクター化した小紋柄の6-3《ミゼット浴衣地》、社名を文字文様にした6-4《フジフィルム浴衣地》などは意匠の個性が目立つ。このような配りものの存在は、夏のくつろぎ着として年齢性別を問わず浴衣が用いられたことの証しでもある。

② 商工業者、料理屋などの手拭い

大企業のように統一的な広告デザイン計画が導入されていない中小規模の各種商工業者、料理屋

などの別注手拭いには、より自由に注文主たちの意思が反映された意匠がみられる。

・ 商工業者

大企業の手拭いの項でも述べた、事業に関する絵柄や社名、屋号等を端的に示す意匠は一般商工業者の別注手拭いの主流でもある。また幕末期以来、多用されてきた「半染め（丈の三分から五分程度までを斜めに区切り染める）」「天鯨（横にして上辺のみ染める）」「中鯨（横にして中段部分のみ一定幅で染める）」「覗き（全体の一部だけを見せるように文様を配置する）」などの基本構図、言葉を読み解かせる「判じ物」の趣向は、昭和戦後期まで一般商工業者の別注手拭いによくみられ、こうした基本の枠組みに依ることが素人による手拭い意匠創案の敷居を下げた側面もあったと考えられる。ただし個々の作例は類型的とはいえ、それぞれ独自の意味や、こだわりが託されている。

判じ物趣向の例に3-22《割箸問屋 浅草 箸市商店》【図21】がある。縦8本と横4本の格子で「はし」、割り箸にちなみ間隔をあけて配した太い横筋で「いち」と読ませる。単純な判じ物ではあるが名前の読み解きには唯一性があり、この例では割り箸という商売物まで暗示している。

3-18、3-26はいずれも半染め構図である。3-18《水道タイル工事 佐藤儀松 亀戸町》【図22】は、タイル張りの浴室図を半染めにし、事業内容を直截にあらわしている。玉石タイルを丹念に描写し蛇口を三つも描くあたりに、注文主自身の施工イメージとしてのこだわりがうかがえる。3-26《煙突屋 奥下彰》は豊田氏の扱いで製作された。将棋好きの注文主にあわせて選んだ将棋盤と駒、達磨の半染め意匠は、店（戸田屋）にあった型紙に基づくが、ねじり鉢巻の達磨を墨色にしたのは商売にちなみ真っ黒になってがんばっているという意味を込めた提案であったという。

戦後の商工業者の手拭い意匠には、さらに定型に納まらない多様な試みが広がっている。

3-27《燃料商 吉田恩太郎商店 足立区千住》（昭和中期）【図23】は商売にちなみ、薪が切り出され家庭に配達されるまでの物語がシンプルな線画で描き出されている。下印も凝ったスタンプ風で細部まで独自性のある意匠である。3-19《谷呉服店 亀戸五ノ橋》（昭和中期）【図24】は、振袖の少女の全身図を多色使いの精緻な細川染であらわした、趣味の手拭いに匹敵する贅沢な作品である。戦後の手拭い復興間もない昭和20年代末頃のもので（豊田氏による）、呉服店としての意気込みがうかがわれる。

注文者自身による「言葉」を中心に据えた意匠もみられる。3-23《おしゃれ都々逸 岩崎照明株式会社 台東区》（差分染 昭和中期）【図25】は、「照明器電気スタンド必ずよくて苦情は岩崎固い店」と、社名も詠み込んだ宣伝文句の都々逸を染めたもので、明らかに注文主の発案である。3-17《石井光（理髪師）深川住吉町》（一色染 昭和中期）【図26】は、理髪店主自作の口上文を染めたものである。「さて其後に控へしは」と白浪五人男のような語り出して「猿江神社のひざもとで切り捨てごめんのご商売秋風寒き焼跡に手取早く店開き（略）なほその上にパンパンのあるかなしかの産毛さへきやうにするて金にするかねがねきこえた 石井の光だよ」と終戦からの自身と商いの来し方の物語を綴っている。

地域の風景を捉えたものもある。8-14《「日本橋横山町大通丹波屋之図」》（昭和末期から平成初期か）【図27】は、明治時代の日本橋横山町大通り、煙管の老舗、丹波屋前の鉄道馬車の通る風景図

を染めた⁴⁶、店と街の歴史を語る意匠である。8-15《江戸橋 JCT 高金 三瓢染》(昭和中期)【図 28】は、日本橋町にあった浴衣地問屋の手拭いであるが、江戸橋ジャンクション(1963年使用開始)とみられる風景を暗い色調の細川染で表現している。高速道路ができ、ビルが建ち並びはじめた風景は、近未来的な魅力を持っていたのかもしれない。

・料理屋など

問屋や小売り、製造業などの手拭いでは、生業にちなむ「もの」を示す意匠が多いのに対し、料理屋、蕎麦屋、寿司屋などでは「気分」を伝える意匠の手拭いが作られている。

8-13《日本橋玄治店 濱田家》(昭和中期から後期)【図 29】は小格子の半染めに、筆書きの蝙蝠を一羽配した簡潔な意匠だが、歌舞伎「世話情浮名横櫛」源氏店(玄治店に掛けた架空の地名)の場を想起させる。小格子は与三郎の着付けに使われる柄、脇役の小悪党「蝙蝠安」は頬に蝙蝠の彫物がある。与三郎に蝙蝠安といえは玄治店、玄治店といえは浜田家、と連想をとつなげる遊び心と老舗の自負を感じさせる。8-20《銀座 一休庵》(昭和中期から後期)【図 30】は蕎麦屋の手拭いである。色数は二色に抑えた細川染で、繊細な蕎麦の筋を重ねて敢えて店名を隠し、東京人らしい含羞と洒脱味を感じさせる。8-16《神田 桜寿し》(昭和後期)【図 31】は、「呑みねい」「鮮食ひねい」「神田の生まれだつてね」と浪曲「石松三十石舟」を思わせる詞書きを添え、船上の旅人たちを飄逸な表情で描いた図を染めたものである。「方久斗酔心」の署名があり、日本画家玉村方久斗により店のために揮毫された作品を染めたとみられる⁴⁷。

このように商工業者たちの配り手拭いの意匠には、社名の判じ物から、施工イメージ図、歴史を語る風景、描き下ろしの絵画まで、硬軟さまざま自由なかたちで、誂え主たちのこだわりやメッセージが染められている。戦後期には紗張型普及もあって、その自由度が広がっていった様子がうかがえる。

④ 専門業者の干支手拭い

染工場、型紙店(伊勢型紙の技術で染め型紙を製作する業者)、専門問屋など、東京の注染関係業界では、独自意匠の干支の手拭いを染めて新年に配る慣習があり、各々の腕の見せ所として、手の込んだ染めと意匠の趣向が競われてきた。一般に東京の手拭いには多色遣いはあまり好まれないが、注染業界の干支手拭いでは繊細な配色の細川染が選択される。配色数が多ければ一度の型付による差分も細かくなり、型付と染めを繰り返すことは一層難しくなる。型紙製作においても染め工程を見通し2枚乃至3枚の型紙に柄を分解して彫ることになり、全工程で技術力が発揮される。

3-28《午年 春駒 村山染工場》(細川染 1966年)【図 32】は午年にちなみ、正月の芸能、春駒の姿を染めたものだが、地色を含め型付と染めを三回繰り返した三遍細川とみられる。3-31《亥年 人形頭 樋口型紙店》【図 33】(細川染 1983年)は亥年にちなむ猪と獅子の頭の玩具の意匠である。多色遣いだが輪郭を広くとり二回の型付と染めで仕上がるよう工夫されている。

2) 芸能界の配りもの

豊田コレクションの歌舞伎、落語、寄席芸、俳優や歌手の別注手拭いの文化と意匠については既に論じている⁴⁸。歌舞伎役者の楽屋手拭いは定紋、替紋、家の好みの文様に基づくことを基本とするが、これは配り浴衣にも共通する。歌舞伎界以外の手拭い意匠は多様であり、記念の配り物など

には著名画家に下絵を依頼した作品も製作される。展示した中にも、花柳流の舞踊家、花柳徳兵衛の配り物として製作された3人の著名挿絵画家による揃い物、4-7~4-9《月雪花》(細川染 岩田専太郎筆「月」、志村立美筆「雪」、富永謙太郎筆「花」)などの例がある。

3) 記念と遊びの誂え

東京では一般の個人や団体が記念や祝い事に自ら意匠を指定して手拭いを染める別注対応も続いてきた。運動会等の記念に子どもの絵を原画として染める例もよくみられた(5-2《祝春季運動会 渋谷区立長谷戸小学校》、5-5《西久保幼稚園第三十三回卒園記念》)。人生の節目にも祝いの思いを込めて手拭いは染められる(5-6《千歳飴袋見立て手拭い》、5-7《結婚披露手拭い》)。豊田氏によれば、手拭いは「良いことがあった時、気分が良い時」に染めるものだという。手拭い好きだった新橋の置屋の主が、暦に5が並んだ記念に作った5-4《昭和55年5月5日 玉泉》は、鯉のほりの下に芸妓たちの名と日付を一色染したあっさりした意匠だが、まさにそのような例である。

おわりに

本稿では東京圏注染の歴史展開について、幕末期江戸で手拭染の産地形成がみられ、これが明治期以降の注染業へ継続発展したことを明示した。明治期の雛形類、注文控え帳から、明治期東京では既に別注品製作が注染手拭い業の主要な仕事であった様子が確かめられた。またこれら別注製作関係資料には、繊細な線の表現や、手数のかかる細川染を必要とする意匠もみられ、技術力を要する(経費を要する可能性もある)選択を良しとする、注文者たちの独自意匠へのこだわりがうかがわれた。より繊細緻密な染め上がりを追求することは、東京圏の注染技法の特質であるが、この姿勢は、浴衣地への注染応用に伴い長板中形の丹念な手仕事を理想とする価値観により引き出されただけでなく、注文者たちのこだわりに沿った別注手拭いへの取り組みを通じ育まれてきた側面もあったと考えられる。

大正末昭和初期にかけて、それほど長くない年数の間に、新傾向意匠の別製浴衣地製作、「趣味の手拭い」製作の隆盛、その影響を受けた芸術性の高い別注手拭い製作が併行し、注染手拭い、浴衣地の意匠、製作技術の水準が高まった様子が把握された。染料の選択肢の増加、紗張型の誕生などの技術上の進展はもちろん、注染技法に通じた図案業の発展と芸術家らの図案創作の試みが併行する図案界の動きも関係していたとみられる。また「美蘇芽会」手拭いや《十二ヶ月劇画手拭》への松山手拭店の関与からは、高水準の技術を要する意匠が実現された背景には、製作を統括し製作現場の技術を調整する存在(専門業者)の働きが大きかったことも改めて把握された。大正末昭和初期の図案業、図案創作の問題は引き続き検討したい。

明治期の注文控え帳でも大半を占めていた商工業者の配り手拭いは、戦後復興期以降も昭和3、40年代をピークとして続き、独自性のある意匠が大切にされた。大企業の手拭い意匠には昭和戦前期からロゴタイプなどが取り入れられ、戦後は広告美術と重なる表現が主流となる。街の商工業者の配り手拭いの意匠には、注文者たちの意向が直接的に反映され、特に戦後期には、紗張型の普及により技術上の制約が減少したことと相俟って、より多様な意匠が生み出された。自家の意匠を

考えることは自身の生業の物語、誇り、大切にしたいことをかたちにするということでもあり、注文者にとっては視覚的な出来映えの追求に止まらない意義を持ったと考えられる。

誂え主のメッセージと遊び心を伝える別注品を配り物とする文化の浸透と継承は、高度な出来栄えを求める別製品製作と並び、専門業者のサポートの下、こだわりある意匠の追求によって職人の技術力を引き出し、今日に至る東京本染注染によるものづくりの特質を形作ってきたと考える。

本稿は JSPS 科研費 24K03510 の助成を受けた研究成果の一部です。調査にご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。

註

- ¹ 中央区日本橋人形町にある 1894 年創業の長板本染、注染を中心とした手染め浴衣の間屋。
- ² 中央区日本橋堀留にある 1899 年創業の注染製品の問屋。
- ³ 「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」(昭和 49 年法律第 57 号 1974 年 5 月 25 日公布)。https://laws.e-gov.go.jp/law/349AC100000057 参照 2025/10/11。
- ⁴ 「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」趣旨について、『伝統的工芸品産業の自立化に向けたガイドブック (令和 6 年 1 月)』経済産業省、p.10。https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/mono/nichiyo-densan/hojokin/full-version_guidebook_2401.pdf 参照 2025/10/11。
- ⁵ 『伝統的工芸品産業の自立化に向けたガイドブック (令和 6 年 1 月)』前掲註 4、p.11。
- ⁶ 「固有の手拭地改良を完成し廿二歳の青年貿易市場に潤歩す」『実業の日本』16(20)、実業之日本社、1913 年 10 月、東京神田区東福田町中寅商店取材写真に確認できる。
- ⁷ 拙稿「江戸東京の誂え手拭の文化と「注込み」染めの登場：一九世紀前中期における初期注染技法とその背景」『宮城学院女子大学人文社会科学論叢』(30)、宮城学院女子大学附属人文社会科学研究所、2021 年 3 月。
- ⁸ 拙稿「東京中形浴衣の近代化と注染の展開：同時代化する手仕事」『研究論文集』(134) 宮城学院女子大学紀要編集委員会、2022 年 6 月。
- ⁹ 「手拭の話」『都の華』(40) 都新聞社、1900 年 11 月 23 日、1~4 頁。この記事の伝える初期段階注染技法成立経緯については、拙稿前掲註 7 のほか、『研究余滴』江戸東京圏における注染のはじまり』『服飾美学』(71)、2025 年 3 月で、染色技術史上の注目点を再確認した。
- ¹⁰ 『明治十年内国勲業博覧会出品解説』『明治前期産業発達史資料第 7 集 第 2』明治文献資料刊行会、1962 年、第二区第六類 94 頁。
- ¹¹ 模様型紙の紗張型製作は、1921 年 1 月に井波義一により「模様型彫刻法」として特許取得され(特許第 37862 号、特明 37862)、さらに 1926 年同人が吊り切りを行う現在一般的な方法を追加した(大正 15 年特許出願公告第 7892 号、1926 年 2 月)。
- ¹² 「江戸にてはさらに紅染を用ひず、祭祀等一様の者も藍染に坊名を書けり。」喜田川守貞著『守貞謄稿』天保八年(1837)起稿、嘉永六年(1853)頃成立、「卷之十五(男服下)」に、江戸では祭礼でも手拭いに紅染を用ひず、藍染めを用いたとある。宇佐見英機校訂『近世風俗志(守貞謄稿)(二)』岩波書店、1997 年、421 頁。
- ¹³ 拙稿 2021、前掲註 7、一〇-二〇(139-143)頁、拙稿 2025、前掲註 9。
- ¹⁴ 江馬務「手拭の歴史」『風俗研究』(73)、1926 年。
- ¹⁵ 江戸時代納涼会編『風流手拭合』芸艸堂、1925。
- ¹⁶ 「地染手拭行はれ、手拭店多く出来る。」齋藤月峯著『武江年表』嘉永元年(1848)脱稿、同三年(1850)刊、金子光晴校訂『増訂武江年表 2』平凡社、1995 年、29 頁。
- ¹⁷ 中村重蔵「手拭の今昔」『問屋雑記帳』(2) 問屋雑記帳の会、1957 年 10 月。
- ¹⁸ 「東京府下工業概況(明治 18 年 10 月東京商工会調査)」『農商工概況』「工業」農商務省、116、117 頁。
- ¹⁹ 「東京府下工業概況」前掲註 18、116 頁。
- ²⁰ 農商務省商工局工務課編『工場通覧』2 冊 明治 42 年 12 月末日現在日本工業協会、1911 年、692、693 頁。
- ²¹ 『上野松坂屋藤栄会八十年のあゆみ』1984 年所載、岡村伊津雄氏寄稿文によれば、武蔵屋、後の岡村染工場は、天保 6 年(1835)時点で、松坂屋と取引があった。武蔵屋は東京の主要商工業者を紹介した『東京商工博覧絵』

- 深溝池源次郎、1885年に、手拭中形染物所として取り上げられている。
- ²² 拙稿 2022、前掲註 8。
- ²³ 大阪での注染の浴衣地応用の始まりについて、1903年第五回内国勸業博覧会に大阪の業者が注染技法浴衣地を展示すると同時に東京中形界に紹介したことが近江晴子「大阪における手拭染（注染）のあゆみ」（『大阪春秋』（41）、大阪春秋社、1984年）に示されており、新家市蔵「三勝染ゆかたを語る」（『問屋雑記帳』創刊号、問屋雑記帳の会、1957年9月）では、明治34、5年（1901、2年）頃大阪で、アニリン染料一色染め簡単な柄の安価な注染浴衣地を染めて東京市場にも出回ったと伝えている。
- ²⁴ 前掲註 23 新家市蔵「三勝染ゆかたを語る」によれば三勝の注染浴衣地製作の創始期には神田の鉦金工場（『工場通覧』2冊 明治42年12月末日現在所載【表2】に手拭染の工場として登場）で染めた。
- ²⁵ 紗張型特許取得時期について、註11参照。
- ²⁶ 『東京ゆかた六十年のあゆみ』東京ゆかた振興会、1964年、26頁、佐藤捨次郎「ゆかたあれこれ」『問屋雑記帳』8号、1958年。
- ²⁷ このほか、『歌舞伎新報』646号、歌舞伎新報社、1886年4月1日所載、同年3月21日開催六二連手拭合の記録に記された手拭いにも注染の4技法が確かめられる。
- ²⁸ 株式会社大丸呉服店東京本店は1910年10月31日をもって閉店したが、糸扇卸部は「東京出張所糸扇店」として営業を続けた（『大丸二百五十年史』株式会社大丸、1967年、263頁、同社による「謹告」『日本信用録 第2版』東京商業興信所、1910年掲載広告）。この注文控え帳には大丸糸扇店の手拭いも見られ、同店からの注文の記録と考えられる。
- ²⁹ うしは染め売り出しと評価について、拙稿前掲註8、6頁に示した。
- ³⁰ 内国通運会社社章について『内国通運株式会社発達史』内国通運、1918年、50頁参照。この社章は1937年の日本通運への統合まで使われたとみられるが、配色から大正期までの製作と推定した。
- ³¹ 上方と異なり手拭いに赤色を嫌うことについて、『守貞謄稿』「卷之十五（男服下）」前掲註12。
- ³² 白木屋呉服店意匠部による『白木手拭集』白木屋呉服店、1921年、松坂屋いとう呉服店意匠部による『あさき』芸艸堂、1924年、図案家宮川河月園による『新江戸趣味 二之巻』丸久合名会社意匠部、1924年等を例示できる。
- ³³ 注染への転換について、拙稿 2022、前掲註 8、14-20 頁。バット染料導入について同前 13 頁。
- ³⁴ 『松屋グラフ』1933(5) 松屋呉服店、1933年5月、2頁。
- ³⁵ 拙稿「大正末、昭和初期創作図案浴衣企画にみるアマチュアリズムと手仕事の染織産業との関係：《草の葉染中形》、《主婦之友浴衣地》を中心として」『デザイン理論』（85）2024年。
- ³⁶ 『松屋グラフ』1929(5) 松屋呉服店、1929年5月、7頁、同1930浴衣号、1930年、10頁。
- ³⁷ 『文壇の華浴衣』は文藝春秋社による創作図案浴衣企画。昭和4年「三頭首 岡本一平氏考案」（『文藝春秋』7(6)、1929年6月他）、昭和5年「新議会 犬飼健氏考案」（『映画時代』8(6)、1930年6月他）は政治家似顔を散らした意匠。本作は後者より類似している。「考案」はアイディアの意味で後者の似顔絵原画もプロの画家によるとみられる。
- ³⁸ 戦時体制、特に経済統制と手拭い、浴衣地製作について、拙稿「豊田コレクションにみる戦時体制と手拭い制作：物資統制の意匠と制作への影響」『宮城学院女子大学人文社会科学論叢』（25）宮城学院女子大学附属人文社会科学研究所、2016年3月で検討した。
- ³⁹ 美蘇芽会について、同会機関誌『佳芽乃曾記』合本、1933年による。
- ⁴⁰ 一例として、第11回《勸進帳》について青風の解説に従来の手拭い染料では不可能と思われた色を「懲り性の松山君の事とて二回も染め直した程の苦心の作」とある。
- ⁴¹ 2016年11月、2025年2月に行った聞き取りに基づく。なお豊田氏と同世代にあたる株式会社戸田屋商店会長、小林栄治氏にも別注手拭いについて伺い、歌舞伎、落語など芸能関係の注文の他に誂えて多かったのは年始の手拭いで、一般企業からの注文を百貨店で盛んに受けたことなど、豊田氏からの聞き取りと同様のことが確認できた（2021年1月に行った聞き取りによる）。
- ⁴² 「手拭の話し」前掲註9、1頁、平出鏗二郎『東京風俗志 中』富山房、1901年、5頁。
- ⁴³ 関西圏で年玉手拭いの文化が見られないことについて、拙稿 2021 前掲註 7、六（153）頁。
- ⁴⁴ 井関経営研究所編『広告文字書体大観：約一千種の書き方』実業界社、1926年、42頁他、昭和初期の広告意匠事例集に紹介されている。
- ⁴⁵ ローウィによる Peace パッケージデザインについて、半田昌之「ピース～日本に新たなデザインの風を運んだ1羽のハト～」、たばこと塩の博物館『レイモンド・ローウィ 20世紀デザインの旗手』2004年を参照。

- ⁴⁶ 鳥武史『横山町丹波屋三百年史』株式会社丹波屋、1990年に「明治27年から昭和36年まで丹波屋社員として貢献のあった長原藤吉氏が明治27、28年頃の横山町の思い出として描いた」とされる同様の構図の図が掲載されており、これをもとに製作されたとみられる。この資料について、たばこと塩の博物館、湯浅淑子氏にご教示いただいた。
- ⁴⁷ 方久斗は戦後の手拭い製作本格復興前の1951年11月に没している。染められた市内局番より製作期は1960～80年代とみられ、店で所蔵していた作品を元に製作された可能性が高い。
- ⁴⁸ 拙稿「芸能人の手拭い誂え制作と豊田コレクション」『宮城学院女子大学人文社会科学論叢』(26)、宮城学院女子大学附属人文社会科学研究所、2017年3月。

表1 「特別展 東京本染注染の手ぬぐい・ゆかた」展示資料一覧

(2025年5月1日～5月11日 於江東区深川江戸資料館) 特記しないものは全て手拭いである。

I 東京本染注染の歴史				
・明治大正期、東京の手拭い製作				
1-1	香得案「しん板手ぬぐひづくし」	木版多色摺	明治 19 年 (1886)	本文参照。
1-2	『手拭印半纏雛形』	木版多色摺	明治 33 年 (1900) 版	本文参照。
1-3	「大丸御店様」注文控え帳 (仮題)		明治 43- 大正元年 (1910-12)	本文参照。
1-4	紅葉館 鹿沢温泉小林亀蔵 注染手拭い型紙	糸掛け型	明治 - 大正期頃	同柄の手拭いの注文が「大丸御店様」注文控え帳にみえる。
1-5	亀井戸	注染 細川・ほかし染	明治後期 - 大正初期頃	本文参照。
1-6	内国通運	注染 差分染	明治 - 大正期	本文参照。
・手拭いにおける昭和初期注染全盛期から戦時体制、戦後復興まで				
1-7	日本郵船	注染 差分・ほかし染	大正後期 - 昭和初期頃	本文参照。
1-8	株式会社 服部時計店	注染 細川染	昭和初期または中期	文字盤に向日葵の花をあしらった意匠は紗張型を前提とするもの。下印は懐中時計。
1-9	川奈ホテル	注染 細川・ほかし染	昭和 11、12 年頃	本文参照。
1-10	「一億一心」	注染 差分染	昭和戦中期	本文参照。
1-11	「凱旋記念 / 禮羽村青年団」	注染	昭和戦中期	陸軍兵士、戦車、戦闘機などの戦争柄を青年団の手拭い地の上に染め直したものの。
1-12	子どもの遊び 猿回し 梨園ぞめ 戸田屋製	注染 細川染	昭和中期	戦後、戸田屋商店で製作された「子どもの遊び」シリーズのひとつ。
・注染浴衣地の成熟から戦時体制へ				
1-13	浴衣地 格子文様	注染 一色染	大正期頃	「うしほ染め」として知られた輸入染料インダスレンプリューで染めたとみられる。
1-14	浴衣地 破れ亀甲に撫子	注染 一色染	昭和初期	藤色を注染浴衣地に使い始めた当初の製品。女優のプロマイド付き。
1-15	浴衣地 抽象文様 松美会銀座ゆかた	注染 細川染	昭和初期	松美会は松屋呉服店の創作呉服の展示会。
1-16	浴衣地 吹雪に鳥文様	注染 細川染	昭和初期	白木屋呉服店の扱い。
1-17	浴衣地 横筋に陰日向花菱	注染 一色染	昭和初期	高島屋呉服店の扱い。綿緞地
1-18	浴衣地 植物文様	注染 一色染	昭和初期	独創的な植物文様。綿緞地
1-19	浴衣地 陰日向つる草文様	注染 一色染	昭和 13、4 年頃か	落綿を使った糸で織った生地に染めている。綿製品非常管理令以降の製作か。
1-20	浴衣地 洲流し風文様 三勝株式会社製	注染 一色染	大正末期作品の復刻染	大正末のバット染料使用浴衣地を 1958 年に復刻染めたもの。
1-21	浴衣地 鹿子入り大麻の葉文様 三勝株式会社製	注染 細川染	昭和 13 年頃	本文参照。
1-22	浴衣地 花菱に松葉流れ文様「旅情」丸久商店製	注染 クレア、一色染	昭和 8 年頃	本文参照。
1-23	浴衣地 飛燕文様「賛歌」丸久商店製	注染 細川染	昭和 8 年頃	昭和 8 年 (1933) 松屋松美会出品。『松屋グラフ』昭和 8 年 5 月号掲載。
1-24	浴衣地 童画文様 丸久商店製	注染 差分染	昭和初期	本文参照。
1-25	政治家似顔浴衣	注染 一色染	昭和初期	本文参照。
1-26	戦争柄手拭い浴衣	注染 差分染	昭和前期	本文参照。

II 昭和初期の「趣味の手拭い」				
・趣味手拭いの会「美蘇芽会」				
2-1	山の幸 東京松山手拭店製	注染 ほかし染	昭和3年(1928)	本文参照。
2-2	風通ふ 東京松山手拭店製	注染 細川	昭和6年(1931)	美蘇芽会第62回作品(昭和6年7月)。鈴木祥湖の図案。
2-3	江戸桜 東京松山手拭店製	注染 一色染	昭和7年(1932)	美蘇芽会第70回作品(昭和7年11月)。鈴木祥湖筆。
2-4	まつり 東京松山手拭店製	注染 細川染	昭和6年(1931)	美蘇芽会の第61回作品(昭和6年5月)。宮川柯月園図案。
・松屋製趣味の手拭い				
2-5	黒猫 松屋製	注染 差分・ほかし染	昭和初期	本文参照。
2-6	むかしむかし 松屋製	注染 差分・ほかし染	昭和初期	蛇行する白地に美しい桃の実が流れてくる。
2-7	田植え 松屋製	注染 細川染	昭和初期	ほかし染を生かし、水田を表現している。
2-8	宿屋の障子 松屋製都鳥会	注染 ほかし染	昭和初期	弥次喜多風二人組の夕餉の一献の影絵。
・松田青風筆「十二月月劇画手拭」				
2-9～20	松田青風筆「十二月月劇画手拭」松山手拭店製	注染 細川染	昭和8-9年(1933-34)	第一回「面妖り」、第二回「助六」、第三回「鳶奴」、第四回「定九郎」、第五回「玉菊」、第六回「文覚」、第七回「土蜘蛛」、第八回「大薩摩」、第九回「暫」、第十回「雪」、第十一回「勸進帳」、第十二回「道成寺」 本文参照。
2-21	同前 第一回～第十二回掛紙	木版 多色摺	同上	本文参照。
III 企業、商店の手拭い				
・企業の配り物－個性とブランド				
3-1	三越呉服店	注染 差分染	大正－昭和初期	本文参照。
3-2	西川 日本橋角	注染 差分染	昭和初期	本文参照。
3-3	蜂ブドー酒	注染 差分染	大正－昭和初期	本文参照。
3-4	マツダランプ 松屋製	注染 差分染	大正末－昭和初期	本文参照。
3-5	木村屋	注染 細川染	昭和初期	パンの木村屋。表情ある線画の食卓図。
3-6	創立八十周年 三井銀行 三越製	注染 差分染	昭和30年(1955)	本文参照。
3-7	Peace 御進物にたばこ	注染 差分染	昭和中期	本文参照。
3-8	でんつう	注染 一色染	昭和中期	本文参照。
3-9	東京渡辺製菓株式会社	注染 差分染	昭和中期	デザイン化された菓子の絵にロゴマークを付す。
3-10	作家漫画家サイン手拭い	注染 差分染	昭和中期	作家、漫画家のサイン、イラストを散らす。雑誌関係の企画とみられる。
3-11	朝日新聞 サザエさん くりちゃん	注染 差分染	昭和中期	新聞連載漫画のキャラクターと朝日新聞のロゴタイプを染めている。
・手拭い意匠の基本				
3-12	半染めに花菱	注染 差分染	昭和中期	【半染め】 丈の三分から五分程度までを斜めに区切り染めたもの。
3-13	覗き片ばみ	注染 一色染	昭和中期	【覗き】 一部だけを見せるように文様を配置したもの。これからますます大きくなる、という意味。
3-14	中鯨におもだか	注染 差分染	昭和中期	【中鯨】 横にして中段部のみ一定幅で染めたもの。
3-15	本所 水田	注染 差分染	昭和初期	【判じ物】 文字絵、縞、格子の数を言葉におき換えるなどの読み解きの趣向。

・商店の手拭い一町のなりわい				
3-16	カネハチクレンザー 菊池商店 深川清澄町	注染 差分染	昭和中期	カネに八の字印を上下二筋に並べる。
3-17	石井光（理髪師） 深川住吉町	注染 一色染	昭和中期	本文参照。
3-18	水道タイル工事、佐藤儀松 亀戸町	注染 差分染	昭和中期	本文参照。
3-19	谷呉服店 亀戸五ノ橋	注染 細川染	昭和中期	本文参照。
3-20	酒、食料品、文字絵散らし	注染 差分染	昭和中期か	パイプの形に「TABACO」、ジョッキ形に「Beer」、丸缶に「のり」など文字絵尽くし。
3-21	筵、ロープ、吠 山崎商店 本所	注染 差分染	昭和中期	小槌形の中に筵、ロープ、吠の文字。上に文字絵風の縄の字、柄の部分は「あみ」の崩し字。
3-22	割箸問屋 浅草 箸市商店	注染 差分染	昭和中期	本文参照。
3-23	「おしゃれ都々逸」岩崎照明株式会社 台東区	注染 差分染	昭和中期	本文参照。
3-24	夏物展 錦や	注染 一色染	昭和中期	呉服店の夏物展示会の案内として配られた手拭い。
3-25	外口氷室 豊島区目白	注染 差分染	昭和中期	つららのような境界線の天鯨にあられ模様で水をあらわす。
3-26	煙突屋 奥下彰 目黒区三田	注染 差分・ほかし染	昭和中期	本文参照。
3-27	燃料商 吉田恩太郎商店 足立区千住	注染 差分染	昭和中期	本文参照。
・年始の挨拶一干支手拭い				
3-28	午年 春駒 村山染工場	注染 細川染	昭和41年（1966）	本文参照。
3-29	申年 孫悟空 相澤染工場	注染 細川染	昭和55年（1980）	申年にちなみ、孫悟空の図。
3-30	戌年 亀戸 濱島染工場	注染 細川染	昭和57年（1982）か	子ども漫画調の犬の絵。親しみやすい図柄だが見事な細川染。
3-31	亥年 人形頭 樋口型紙店	注染 細川染	昭和58年（1983）	本文参照。
IV 芸能と手拭い				
・歌舞伎				
4-1	9代目市川高麗蔵	注染 差分染	昭和初期頃	替紋（四ツ花菱）をはみ出すような大きさに染める。「覗き」の構図。
4-2	6代目尾上菊五郎（キクゴロ格子）	注染 一色染	昭和初期頃	隙間がないほど線が太いキクゴロ格子。
4-3	8代目澤村宗十郎	注染 差分染	昭和28年（1953）	襲名時の配り手拭い。観世水に千鳥は好みの文様。下印の囲みは虫喰い丸。
4-4	二世尾上松緑、八世松本幸四郎、十一世市川團十郎	注染 一色染	昭和30年代後半頃	三人の名題役者が揃った舞台の記念。それぞれの紋にサインを添える。
4-5	17代目市村羽左衛門	注染 一色染	昭和60年（1985）	市村格子の手拭いに、「暫」の鯰坊主の隈取が押されている。
・日本舞踊、邦楽など				
4-6	花柳徳兵衛	注染 差分染	昭和41年頃	花柳流の桜と柳を背景に、斜めに覗かせた摺物に名を染めている。
4-7～9	岩田専太郎、富永謙太郎筆、志村立美筆 「月雪花」	注染 細川染	昭和中期	本文参照。
4-10	小唄 井筒小伊都 木村莊八筆	注染 細川染	昭和中期	画家の木村莊八の下絵による小唄の師匠の手拭い。猫が弟子を教えている。
4-11	舞踊手拭い「子守」	注染 細川染	昭和中期～後期	発表会の配り物。風車と人形の取り合わせは「子守」を連想させる。
4-12	桜川長寿	注染 一色染	大正～昭和初期	幫間桜川長寿の手拭い。三鳥手風の構図に桜を当てはめ、3本筋とあわせ桜川と読ませる。

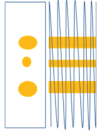
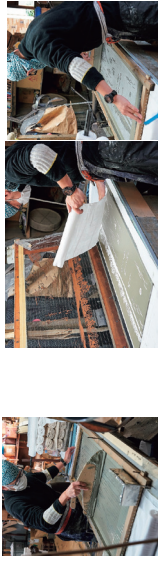
4-13	幫間狸塚建立演芸会	注染 細川染	昭和 38 年頃	三味線や扇子を持った狸が並ぶ。東京花街の幫間 24 名の名入り。幫間塚建立に因む。
・落語、寄席芸				
4-14	5 代目古今亭今輔	注染 一色染	昭和中期	お多福面の前髪は「今」紐は「輔」の文字。
4-15	5 代目柳家小さん	注染 一色染	昭和中期	牡丹文字の「小三」を並べている。
4-16	初代林家三平「林家三平三番之図」	注染 一色染	昭和中期	三番叟を舞う初代三平の図。今村恒美画。
4-17	キャンデーボーイズ	注染 差分染	昭和中期	ビリヤードのボールとキューを合わせた軽妙な意匠。キャンデーボーイズは太神楽曲芸師。
4-18	初代林家木久蔵	注染 差分染	昭和中期	似顔の鞍馬天狗。手塚治虫画。
・演劇、映画				
4-19	水谷八重子	注染 細川	昭和初期	〈裏八重桜〉と〈結び柏〉紋、サインを染める
4-20	クレージーキャッツ	注染 一色染	昭和 38 年頃	映画「香港クレージー作戦」のキャンペーン用。一部メンバーの直筆サイン入り。
4-21	新網走番外地 嵐呼ぶダンブ仁義	注染 差分染	昭和 47 年頃	映画のキャンペーン用。陰影を強調した印象的な高倉健の横顔と、サインを染める。
・歌舞伎趣味の手拭い				
4-22	勸進帳	注染 細川染	昭和 29 年頃	弁慶が白紙の巻物を勸進帳にみせかけて読み上げる姿を大きくとらえている。三遍細川。
4-23 ~ 25	戸田屋芝居絵シリーズ「世話情浮名横櫛」、「勸進帳」、「伽羅先代萩」	注染 細川染	昭和 29、31 年 (1954、56)	江戸時代の芝居小屋を描いた舞台図のシリーズ。「伽羅先代萩」のみ昭和 31 年製。
V 記念や遊びのあつらえ				
5-1	第二回女子美体育祭	注染 細川	昭和中期	型の表情を追求した草花の図案。
5-2	祝春季運動会 渋谷区立長谷戸小学校	注染 差分染	昭和 42 年 (1967)	抽象画のような児童の作品。
5-3	桐蔭水泳部 1973 TOYU club	注染 一色染	昭和 48 年 (1973)	浜辺に集った水泳部メンバーのシルエット。
5-4	昭和 55 年 5 月 5 日 玉泉	注染 一色染	昭和 55 年 (1980)	本文参照。
5-5	西久保幼稚園第三十三回卒園記念	注染 一色染	昭和 61 年 (1986)	園児一人ひとりの自画像を並べた卒園記念の手拭い。
5-6	千歳飴袋見立て手拭い	注染 差分染	昭和中期	子どもの七五三の内祝い用。畳むと千歳飴の袋のかたちになる。
5-7	結婚披露手拭い	注染 差分染	平成	名前にちなむ意匠を案じ、結婚披露用に染められたもの。
VI 暮らしの中の浴衣				
・企業の配りもの				
6-1	カプトビール浴衣	注染 一色染	大正～昭和初期	ロゴマークとみられる柄を染めた浴衣地を子ども用浴衣に仕立てている。
6-2	東芝	注染 一色染	昭和中期	東芝ほかレコード会社の名を染めている。
6-3	ミゼット浴衣地	注染 一色染	昭和中期	本文参照。
6-4	フジフィルム浴衣地	注染 一色染	昭和中期	「ふじふいるむ」と続けた切り絵風の文字模様、
6-5	スズキ自動車浴衣地	注染 差分染	昭和中期	ロゴデザインを染めたお揃い浴衣地。
・芸能、相撲界の配りもの				
6-6	七代目尾上菊五郎浴衣地	注染 一色染	昭和 40 年代	「よきこときく」文様。掛紙「寿 七代目尾上菊五郎」を伴う。

6-7	田村正和浴衣地	注染 地染まり一色染	昭和 50 年頃	新橋演舞場での公演で座長として出演者に配ったもの。名前の文字意匠。
6-8	橋幸夫浴衣	注染 クレア一色染	昭和後期頃	菱形にかたどった橋幸夫の文字、笹リンドウ紋、四つ目結紋をつないだ意匠。
6-9	初代若乃花浴衣地	注染 一色染	1958 年 -60 年頃	横綱をあらわす太い綱にシャープな書体の「若乃花」の文字。
6-10	舞の海浴衣地	注染 一色染	平成初期	網目にモモンガ、「舞の海」の文字を染める。
6-11	小錦浴衣地	注染 クレア差分染	平成初期頃	水色地にサインを添えた小錦似顔スタンプ柄とタバスコ、KONISHIKI の文字。
・女、男、こどもの浴衣-昭和戦後全盛期の浴衣と図案				
6-12	肉筆注染浴衣図案各種	肉筆彩色	昭和中期	
6-13 ~ 18	各種注染浴衣地見本帳、東京読売巨人軍浴衣地	注染 各種	昭和中期	一般販売用浴衣地見本帳、反物。歌手やスポーツ選手のプロマイド付きもある。
Ⅶ豊田満夫氏の仕事				
Ⅷ手拭いにみる東京				
8-1 ~ 5	「帝都十景」手拭いより「東京駅」、「日比谷公園」、「清洲橋」、「地下鉄道」、「日本橋」三越製	注染 差分染	昭和 6-10 年頃	震災復興後の首都東京の名所風景を主題とした揃い物。
・手拭いでたどる東京				
8-6	江東区冬木町 青木商店	注染 差分染	昭和中期	みの笠を着けた筏乗りの姿をあらわした材木商の手拭い。
8-7	木場 小安	注染 細川染	昭和 30 年頃	木の葉に「木」の字で「きば」。
8-8	小義商店	注染 一色染	昭和中期	鳶口と材木の木口を単純化した図案。材木商の手拭い。
8-9	日本橋 黒田薬品株式会社	注染 差分染	昭和中期	日本橋と富士山を背景とし、のれんに社名等を染め抜く。
8-10	日本橋 白木屋	注染 差分染	昭和中期	本文参照。
8-11	日本橋堀留 梨園染	注染 天ぼかし	昭和中期	天ぼかしの小紋地に役者紋を散らした凝った意匠。
8-12	「潮染中形初荷の光景」戸田屋商店製	注染 細川染	昭和中期	うしほ染発売元であった戸田屋の職がみえる『風俗画報』口絵を写している。
8-13	日本橋玄治店 濱田家	注染 差分・ぼかし染	昭和中期～後期	本文参照。
8-14	「日本橋横山町大通丹波屋之図」	注染 細川染	昭和末期～平成初期	本文参照。
8-15	江戸橋 JCT 高金 三瓢染	注染 細川染	昭和中期	本文参照。
8-16	神田 桜寿し	注染 細川染	昭和中期	本文参照。
8-17	神田のふく田	注染 一色染	昭和中期	鏝に田で「かんだ」。納札の意匠を写した納札家の手拭い。
8-18	魚河岸 柳与	注染 差分染	昭和中期	魚河岸問屋の手拭い。反物でもらう板前は贈り鯉口シャツに仕立てる。
8-19	羽田 附船小揚	注染 差分染	昭和初期	模様は小の字菱に網目で「小網」と読ませる。
8-20	銀座 一休庵	注染 細川	昭和中期～後期	本文参照。
8-21	銀座の柳	注染 差分染	昭和初期	昭和 4 年封切り映画主題歌「東京行進曲」の一節に寄せた柳とガス灯。
8-22	銀座 越後屋「御本丸大奥年中行事浮世絵之写」	注染 差分・ぼかし染	昭和後期頃	大奥での出店を描いた寺崎廣業「御本丸年中行事大奥灌佛會圖」を写す。
8-23	霞ヶ関ビル	注染 一色染	昭和 43 年頃	地上 36 階建ての霞ヶ関ビルを略画風に描いている。
8-24	永田町 国会議事堂	注染 差分染	昭和中期	議員バッチを添えた国会議事堂風景。土産用。
8-25	上野 東京国立博物館表慶館	注染 ぼかし染	昭和後期頃	切絵風の東京国立博物館表慶館風景。

8-26	上野 不忍池 台東区一葉記念館	注染 細川染	昭和後期～平成	樋口一葉の小説「十三夜」の一場面を描く。
8-27	中洲 喜可久	注染 差分・ほかし染	昭和30年代	中洲にあった有名料亭の手拭い。
8-28	両国 松屋製	注染 細川染	昭和初期	昭和初期の両国風景。手前に船宿、対岸には旧国技館、工場の煙もたなびく。
8-29	両国 中村園本店	注染 一色染	昭和中期	両国の葉茶屋、中村園の手拭い。
8-30	相撲取り組み	注染 一色染	昭和後期	1970年代から80年代初めに活躍した力士の名がみえる。
8-31	東京蔵前 マルキ玩具 K. K.	注染 細川染	昭和中期	蔵前の玩具問屋の手拭い。暖簾に見立て、おもちゃの図が染められている。
8-32	浅草仲見世風景	注染 差分染	昭和初期	老若男女で混み合う浅草寺仲見世風景。
8-33	浅草寺	注染 差分染	昭和後期	雲文に蓮華を散らした地に御朱印を染めた、浅草寺の手拭い。
8-34	浅草風物詩	注染 一色染	昭和中期～後期	西の市の熊手、江戸玩具、羽子板、御神輿、ストリップ、天井まで、浅草名物尽くし。
8-35	浅草 長尾	注染 一色染	平成	江戸木版画工房の手拭い。
8-36	吉原 仲之町夜桜風景	注染 細川染	昭和初期	昭和初期の趣味の手拭い頒布会、都鳥会で製作されたもの。
8-37	向島 櫻茶ヤ	注染 一色染	昭和中期	向島にある昭和8年創業の料亭の手拭い。

東京本染注染の主要工程

【型付】布を屏風だまみにしながら木枠に張った型を上げ下げし防染糊で型付けする。



糊は生地画面に付着する。

木枠に張った型紙を、生地の上に下ろして、防染糊をヘラでこすりつける。

【注染】型付け後、折り重ねた生地の上から染料注ぐ。



重ねた生地を染め台に置き、差し分けなどの場合は糊の堤防を作り、口の長い「ヤカン」で上から染料を注ぐ。

台の下に組み込んだ吸引装置のペダルを踏み、染料を素早く浸透させる。

染め上がり（部分）



* 上から染料を注ぐことにより、ぼかし染や多色の差分染ができる。

〈伊勢保染工所にて撮影〉

注染技法の種類

- ・一色染：一色の染料のみで染める。
- ・差分染：一度に多色の染料で色分けて染める。
(図2 背景色と猫は差分染)
- ・ぼかし染：境界をつけずに同時に異なる色の染料を注ぎ、ぼかしを表現する。(図2 猫の部分)



図1 4-2 《6代目屋上菊五郎(キクゴロ格子)》

- ・細川染：一度染めた後、再度型付けして染め、数色を重ねる、隙間なく合わせる。



図3 1-8 《株式会社 服部時計店》

表2 農商務省工務課編『工場通覧』2冊 明治42年 12月末日現在にみる東京の手拭い染業

都府縣	工場名稱	製品種類	所在地	工場主名	創業年月	職工数		原動力
						男	女	
東京	普義業合資會社	手拭	沼津市	白石藤兵衛	明治四十二年	六	一	一
	田中染物工場	手拭	沼津市	田中政次郎	明治四十二年	六	一	一
	川吉手拭染工場	手拭	沼津市	川吉五郎	明治四十二年	一	一	一
	鏡金染物工場	手拭	沼津市	鏡金藤三郎	明治四十二年	一	一	一
	中伊工賃同	手拭	沼津市	伊藤久吉	明治四十二年	一	一	一
	中村染物工場	手拭	沼津市	中村梅太郎	明治四十二年	一	一	一
	中村手拭染工場	手拭	沼津市	中村梅太郎	明治四十二年	一	一	一
	中久染物工場	手拭	沼津市	中久吉	明治四十二年	一	一	一
	小海手拭工場	手拭	沼津市	小海清太郎	明治四十二年	一	一	一
	關谷工場	手拭	沼津市	關谷平七	明治四十二年	一	一	一
	關谷工場	手拭	沼津市	關谷平七	明治四十二年	一	一	一
	關谷工場	手拭	沼津市	關谷平七	明治四十二年	一	一	一
	關谷工場	手拭	沼津市	關谷平七	明治四十二年	一	一	一
	關谷工場	手拭	沼津市	關谷平七	明治四十二年	一	一	一

農商務省工務課編『工場通覧』2冊 明治42年12月末日現在にみる東京の手拭い染業
 作成(傍線は筆者による加筆)



図4「魚がし」
1-2『手拭印半纏雛形』

図5-1~6
1-3「大丸御店様」注文控え帳
(仮題)



図5-1 表紙



図5-2 左「甲馳製造 山田」右「家康印発売元 神谷系店」



図5-3「向嶋 奥植半」

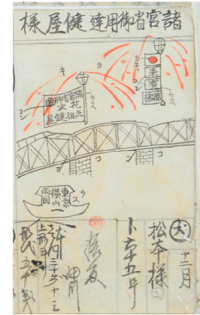


図5-4「諸官庁御用達 鍵屋」

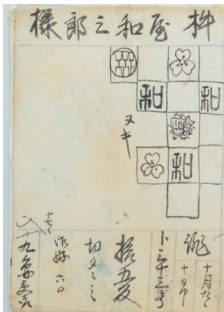


図5-5「杵屋和三郎」



図5-6「小林亀蔵 紅葉館」



図6 1-4「紅葉館 鹿沢温泉 小林亀蔵」
注染手拭い型紙」

図8
1-6《内国通運》



図7
1-5《亀井戸》



図9
1-7《日本郵船》



図10
1-9《川奈ホテル》



図11、図13以外は全て豊田コレクション所蔵



図11 左1-24《童画文様》浴衣地見本
右1-22《花菱に松葉流れ文様「旅情」》浴衣地見本
有限会社丸久商店所蔵



図12 1-15《抽象文様 松美会銀座ゆかた》

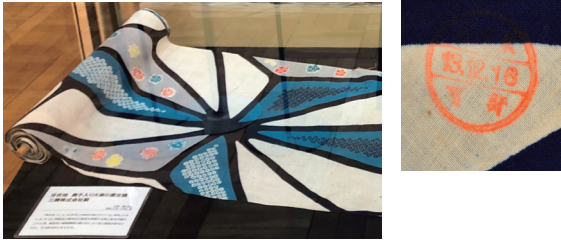


図13 1-21《鹿子入り大麻の葉文様》浴衣地 右上 同部分
三勝株式会社所蔵



図15
2-11松田青風筆《十二月劇画手拭 第三回「鳶奴」》
右 2-21《第三回掛紙》



図14 2-1《山の幸》



図16 3-2《西川》



図19 3-8《でんつう》



図20 3-6《三井銀行》



図17
3-4《マツダランプ》



図18
3-7《Peace 御進物にたばこ》

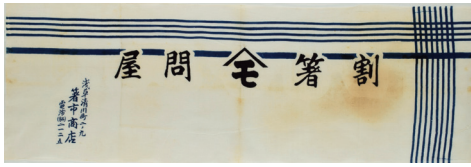


图21 3-22《割箸問屋 浅草 箸市商店》

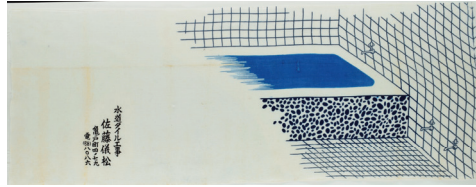


图22 3-18《水道タイル工事 佐藤儀松 亀戸町》



图23 3-27《燃料商 吉田恩太郎商店 足立区千住》

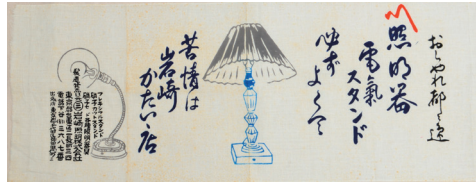


图25 3-23《おしゃれ都々逸 岩崎照明株式会社 台東区》

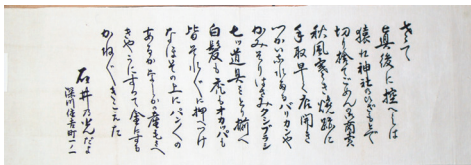


图26 3-17《石井光(理髮師) 深川住吉町》

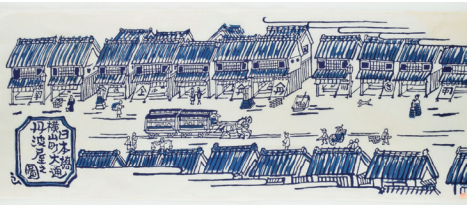


图27 8-14《「日本橋横山町大通丹波屋之図」》



图24 3-19《谷呉服店 亀戸五ノ橋》



图30 8-20《銀座 一休庵》



图28 8-15《江戸橋JCT 高金 三瓢染》



图29 8-13《日本橋玄治店 濱田家》



图31 8-16《神田 桜寿し》



图32 3-28《午年 春駒 村山染工場》



图33 3-31《亥年 人形頭 樋口型紙店》

The lineage of Tokyo area Chūsen dyeing techniques and designs seen through made to order items and special made products: Investigation of materials for the “Special Exhibition: Tokyo Honzome Chūsen Tenugui and Yukata”

OKUBO Naoko

Based on the contents of the “Special Exhibition: Tokyo Honzome Chūsen Tenugui and Yukata”, this paper aims to reexamine the historical development of Chūsen dyeing in the Tokyo area since late 19th century, and to concretely show the aspects of the pursuit of designs for made to order items and special made products, along with the characteristics of the actual dyeing techniques.

A close examination of documents edited by the Ministry of Agriculture and Commerce during Meiji period clarified some aspects on the historical development of Tokyo area’s Chūsen dyeing: around the end of the Edo period, tenugui production area was formed in the city of Edo and this developed into the Chūsen dyeing craft industry in Tokyo from the Meiji period.

From the Meiji period tenugui design books and records of made to order production, it was confirmed that made to order products were already the main business of the Chūsen tenugui industry in Tokyo during the Meiji period. These documents concerning made to order productions include designs that require delicate line expression and the laborious Hosokawa dyeing method, revealing the inclination of clients towards elaborate design. These clients were ready to accept the using techniques that required higher skills, therefore at times an increase in production expenses.

The pursuit of more precise and delicate dyeing is a distinctive feature of the Tokyo region’s Chūsen dyeing, and this was reflected in its designation as METI–designated traditional craft in 2023. This characteristic was not only brought out by the ideal of meticulous handwork of Nagaita–chugata dying methods, which was considered an ideal with the application of Chūsen dyeing to yukata fabrics from the Taisho period onwards, but it is also thought to have been nurtured through efforts to create made to order tenugui that met the preferences of customers.

The majority of orders recorded in the Meiji period were for tenuguis for greeting gifts ordered by merchants and industrialists. This continued even after the postwar reconstruction period, peaking in the 1960s, and original designs were highly valued. The tenugui designs of large corporations overlapped with advertising art from the prewar Showa period through to the postwar period. However, the quality of the final products depended on the corrections made on the preparatory drawings by highly skilled artisan designers or stencil makers.

Tenugui design for the greeting gifts ordered by merchants and industrialists are more diverse, reflecting the personal requests of those who placed the orders. Creating their own design is also about giving shape to the narrative of their business, their pride, and the things they value, and for the orderer, this has significance that goes beyond the pursuit of a quality visual finish.